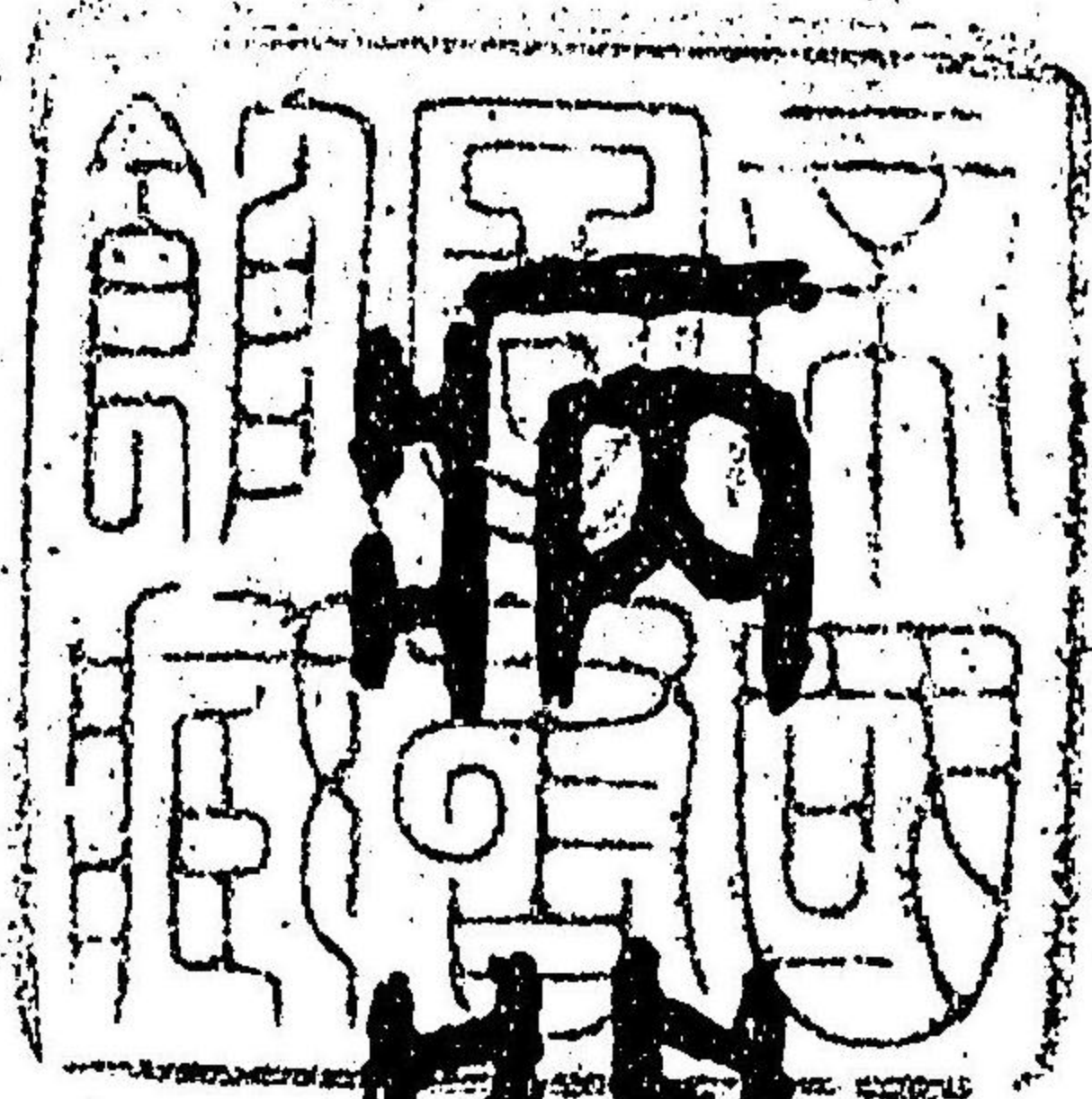


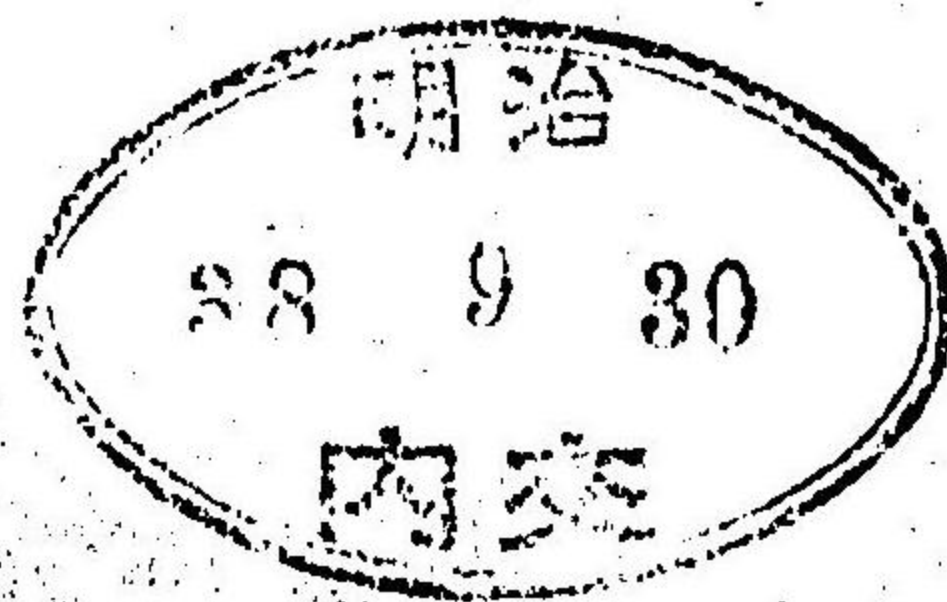
工6040

98-185



内閣

鑒



✓

この書を坪内雄藏先生

及故大西祝先生に献ず

序

本書は、主として予が兩三年來の宗教上の感想録を輯めたるもの、謂はゞ、予が近時に於ける宗教上の小自覺史とも見るべきもの也。隨ひて本書は宗教の理論的、組織的研究の方面に於いては、殆んど全く之れを闕如せり。若し本書に一分の特色なるものありとせば、そはかゝる客觀的研究に若干の材料、事實を供給し得べき望みある點に存すべし。要するに、本書の内容は、出來得るだけ忠實に、予が内生活の隨時の經

驗を叙述し、若しくはこの隨時の經驗に基づきて多少の論評を加へたるものより成れり。若しこの小著が、世の人生問題、安心問題等を解釋せんとする未見の友に、些かなりとも慰藉光明を與ふるを得ば、著者の光榮也。

本書の校正及び表紙意匠の案等に關して、在早稻田大學の望月世教氏を勞したると尠からず、記して深く感謝の意を表す。

本書中「答道友書」、「默想記」、「宗教上の光耀」、「病間録」、「讀莊子」、「驚異と宗教」の六篇は雜誌『新小説』に、「爐邊枕頭」、「秋の力」、「禪思錄」、「方丈錄」、「心のたどり」、「心響錄」(隨感錄)の六篇は『太陽』に、「信のこゝろを思ふ」、「人格のこゝろを思ふ」、「心の一ふし」、「予が見神の實驗」、「安心立命の二法門」の五篇は『新人』に、而して其の他は一二篇を除くの外『明星』、『中央公論』、『小天地』、『基督教世界』、『時代思潮』、『讀賣新聞』等に掲載したるもの也。こゝに、此等諸篇を本書に轉載するにつきて、諸雜誌新聞發行者諸氏の與へられたる好意の許諾を謝

す。

序

明治三十八年八月

著者

病閒録

目次

宗教的真理の性質……………一

基督の詩……………一六

悲哀の高調……………二四

一家言……………

爐邊枕頭……………

真理の空名……………

學究と獨斷……………

秋の力……………

苦痛と解脱……………

目次

目次

○(病鶏を傷みて)……………六〇

答道友書……………六八

信のこゝろを思ふ……………八八

人格のこゝろを思ふ……………九六

道學論一節……………一〇九

禪思錄……………一一六

法喜……………一二六

眞善美と神……………一二八

心情の宗教……………一二八

大いなるかな言や……………一二六

新人と大自在……………一二七

功利と宗教……………一三三

方丈録

○悟道の意義……………一三三

安心立命と永生……………一三七

充實生活と同情……………一四六

默想記……………一五〇

理想信念の自家實現……………一五〇

職分に對する自覺……………一五六

兄神の眼……………一六一

心のたどり……………一六五

宗教上の光耀……………一七九

(神祕的實驗の一面)……………一七九

病閒録……………二〇〇

目次

目次

四

知己……………二〇〇

價值……………二〇三

理性……………二〇八

愛……………二一四

真理と人生……………二一九

成功の意義と安心立命……………二二九

人に答ふる書……………二三五

◎煩悶の人に答ふる書……………二四五

心嚮録……………二五〇

○悲哀の祕義……………二五〇

心性の要求……………二五五

心機縦横……………二五九

◎自力信と他力信……………二六〇

餘録二題……………二六四

◎絶對神と差別神、超絶神と進化神……………二六四

平等と差別……………二七二

偶思録……………二七八

(ヨブとポロ。希臘的意識と基督教的

意識)……………二七八

人に與へて煩悶の意義を説く……………二八七

心の一ふし……………三一一

法友……………三一一

○恩惠の生活……………三二五

讀莊子……………三二九

目次

五

目次

(莊子の解脱哲學)……………三一九

驚異と宗教……………三四九

予が見神の實驗……………三六六

㊦ 安心立命の二法門……………三八九

神火と人火……………四〇六

㊧ 應心録……………四二二

(自己の實在、自己と神)……………四二二

*

病閒録目次終

病閒録

綱島梁川著

宗教的眞理の性質

自然に生命ありやてふ一問は客觀的解釋にて盡くし得可らず、人あり若し我れは自然の生命を感ずと謂はんか、此に件の問題は始めて肯定の解答を得たるなり。科學の刀を取つて、限なく自然の一木一草をあさり盡くすとも、そこに生命の影は宿らずして、翻つて自家意識の一隅に、神祕な

宗教的眞理の性質

る自然の生命は見出ださるゝなり。されば自然に生命ありてふとは、自然の生命を感ずといふとに歸著すべく、此くの如き感情を外にしては、自然に生命ありや否やの問題はつひに解き得らるまじきなり。故に自然に生命有りてふ眞理は、自然の生命を感ずる吾人の主観的事實に成り立つ眞理なり、而かも其の主観的事實たるの故を以て、一毫其の確實性に累あるを見ず。

吾人神を知るといふ、而かも嚴密には、寧ろ神を感ず若しくは味ふ、語や、穩正を缺けども、とこそいふべきにはあらざる乎、神とは詰まり、吾人至極の感情の總量にあらずや、東ねにあらずや、會歸にあらずや。如是感情以外の神は、剩すところ唯だ第一原理の概念のみ。理觀の神は、宗教の神に

あらず。宗教上にいふ神は、理觀を第二義とし、慧解を奴婢とす、神は、たゞ情もて感じ、情もて觸るゝを容るすのみ。是の故に神を感ずるものに取りては、神の存在問題は既に氷釋し盡くされたる問題なりといふべく、神を感ぜざるものに取りては、神の存在問題は、永恒不釋の謎語として存すべし。むしろ此かる人は、宗教問題に干るの權利なしといふて可なり。要するに、こゝにては感ずといふ意識上の事實が、やがて神の存在の唯一の根據なり、感ずることが即て在ることの別名なり。神を感じ、神を味ふものに取りては、この意識上の事實が、神の實在の唯一論證たるべくして、他にまた何等の客觀的論證を藉るを要せず。もし眞に神を感ずることなくして、神を知ると言ふものあらんか、こは思

ふに宗教分内の神にあらずして、哲學上第一原理に關する智識の事なるべきのみ。

以爲へらく宗教的眞理の特質は實にこゝに存ずと。宗教の界にてはすべて意識上の事實が唯一の眞理たるなり。若しこゝに神と自己及び全人類との間に親子相愛の關係あるとを切實に感じて神は愛なりと叫ぶ一宗教的天才、耶穌の如きあらんか、何物の權威か、よく來たつてこの事實を打消し、この眞理を否定し得るものぞ。哲學若し之れを迷信と斷ぜんか、哲學はいづこよりして、此く斷ずるの權利を得來たれる。神は愛なりといふことの果たして迷信なるか、否かは、躬ら切實に意識上の經驗を経ざる限りは斷定しがたき底の事にあらずや、自ら砂糖の味を嘗めて、その感覺

を經驗せざるものには、砂糖の味の甘さか否かは理もて解せらるまじきと同じく、神の愛なりや否やは、自ら此の一境の意識的實驗を有せざるものに取りては不可解の事なり。之れを一直に、迷信と斷じ、不合理と斷ずるが如きは、理性の僭越なり、獨斷なり。所詮、趣味は趣味をもて會すべく、意識上の事實は意識上の事實をもて迎ふべく、宗教上の眞理は宗教上の經驗をもて照らすべきなり。而して宗教的經驗に饒めるものに取りては、神人相愛の一義は、實に天地人生の最深奥の眞理と響くものにあらずや。而してこはまた實に宗教的向上心を有するものの躋り到らんと努力する最高意識にあらずや。

此くの如く意識上の事實が取りも直さず宗教上の眞理

なるが故に、理性の客観的見解をもて、其の理非を叩かんとするは、空を打つの類といはざる可らず。若し神に愛ありとするは、一種の擬人觀にして、客観的眞理にあらずといふを楯に、件の眞理を否まんとするものあらんか、是れ未だ宗教的眞理の特質を解せざるものなり。客観的に神なるものありやなしや、神の愛なる者ありやなしやの一事は、毫しも宗教的眞理を撼かすに足らず、何となれば、神は愛なりて、ふ事は、神は愛なりと感ずる意識上の事實に成り立つ宗教的眞理にして、此の事實を覆さざる限りは、理性の客観論は何等の權威をも有すまじければなり。曾て涙をもて冷たき麵麩を割きながら、悲しき一夜を泣き明かしし事なき者は、上天の力を知らずと詩人の歌ひし如く、宗教上の眞理は、

意識の實證をもて近づくの外、道なきなり。意識の實驗なきものは、西行法師の「かたじけなさに涙こぼるる」の單純なる宗教的消息をだに不可解と速断し去るなるべし。

人或はまた、神は主觀の産なり、理想の影也といふの理由をもて、動もすれば其の確實性を傷けんとす（フ・オイエルバツハの如き其の好代表者なり）。されど、如是見解は未だ宗教的眞理の特質を領せざるものなり。神は實に主觀の産なるべし、理想の影なるべし、而かも、此くして既に意識の要求に迫られて、姿を現じたる以上は、其は夢にあらず、幻しにあらずして、一個儼然たる實在たるなり。吾人が之れに歸依渴仰の至誠を瀝ぐは、一片輕浮なる數奇心に出づるにあらずして、眞の實在に對する崇拜のこゝろなり。嗚呼、深い

かな神の意識。吾人神を造るか、神吾人に現はるか、語は
兩様にして、意は些かも差錯する所あるを見ず。若し、人神
を造るといはんか、此に意味する所は、はかなき一時のすさ
び、若し、は出來心の所造の義にあらずして、わが本性、必至の
要求の然らしむる所の義なり。されば、我れ自ら神を造り
て、われ自ら其の權威に服するなり。我れ自ら主觀的に神
を造り出づると同時に、自ら儼然たる客觀性を之れに認む
るなり、認めざるを得ざるなり。われ自ら神を祈り出だし
ながら自ら其の實在の下に跪拜するなり、跪拜せざるを得
ざるなり。こゝにては、造ると在ると、やがて一也。驚くべ
きかな宗教的天才の意識。耶蘇、至愛の天父を説く、或は之
れを耶蘇自身の理想性の所造なりといふも可、而かも彼れ

は之れを造ると同時に、之れに客觀的實在性を認めて、之れ
に跪きぬ、否實に此く認めて跪かざるを得ざりし也。宗教
的意識は自ら神を造ると同時に、之れに確實性を與へて、之
れを空想と別ち、之れに實在の極印を附するなり。されば、
人よく自ら神を造ると同時に、此く造られたる神は同時に
永切の實在性を帯びたる一個の權威として、吾人に蒞むな
り、而して何物も亦この權威を褫ふものあらざる也。さる
を、主觀的產物なるが故に、理想の影なるが故に、神を不確實
性のものとするは、是れいまだ宗教的知識、延いては一切價
値意識の性質をも解せざるものといふべし。されど、一步
を深うして考ふるに、吾人よく神を造るといふは、語に僭上
の嫌あり。嚴密に論ずれば、如何なる天才も全く新たなる

ものを創りいだすと能はず。造るといふものは、発見なり、直観なり、*seeing*なり、*penetration*なり。神といひ、神の愛といふもの、吾人が理想の衣を或物に被らしめて之れを客観視せる者畢竟は主観の産物に過ぎずと言はんか、此の解毫も宗教的意識の眞理を累するに足らざると、前論の如し。されど尙ほ一段切實深奥の解ありとせば、そは人神を造るにあらずして、神人に顯はるとの解なるべし。一切の創造は、一切の発見也。創造の底には深奥の實在あり。吾人が理想を神に加被すといふもの、その實は神の中に吾人の理想を見いだせるなり。人よく何物をか創り得んや。吾人自ら僭して創れりと思ふもの、實は天地永劫の懷ろにある眞理の大珠小珠が、吾人の意識鏡上に落ち來たれるのみ。

そは直観なり、発見なり、受納なり、感得なり。人まことに心を虚しうして、はじめて神の姿を仰ぐを得べきなり。

世に「合理的信仰」もしくは「理性の宗教」てふ語あり。されど此等の語の果たして如何程の意味にて是認せらるべきかは、須らく一考を要すべき者あるべし。精しくは、理性は宗教的意識の中にて如何なる位置職分を占むる者、又占むべきものなるかといふと、論の要點なれども、委曲は姑く別論として、こゝに少しく辯ふべきは、宗教上の信仰は、理性の根據にのみ依屬するものにあらずして、ちのづから理性とは別なる一境、即ち非理性的方面に據を托するの一事なり。理性は、意識と事實とを造る能はず、又意識と事實とに先だつ能はず。(意識と事實とを材として組織するとはあるべ

し。随つて天才が一種の新宗教的意識を開展し來たるに方りてや、理性は其の驚くべき創造的天才の前に跪かざるを得ず、理性は宗教的意識が立し來たる事實を打消し、もしくは左右すること能はずして、唯だ之れを新事實として、打ち仰ぎ、且つ迎ふるの外なきなり。意識を給し、事實を與ふるものは吾人の非理性的方面にして、理性は之れに與らず、理性は要するに事實を趁うて走る者也。かくはいへど、吾人は全く理性の權能を否むものにあらず、吾人の宗教的意識の中には、まばく理性を備うて艾除せざるべからざる不合理の分子の混ざるとあり。此くして理性の醇化と批評とを受けて、古來宗教的意識の次第に清淨純粹となり來たれる進化のあと、歴々として指すべきものあり。されど

理性の職は要する所消極的の一端に出でざること、つひに否むべからず。即ち其は唯だ吾人の意識に不合理の分子の混淆せる場合に、之れを掃蕩して、吾人の理性の要求と背馳せしめざるまでの事にして、此れ以上の事、非理性的方面の事に關しては、理性は一指の批判をだに挿むの能なきなり。こは理性とは交渉以上の境、而して宗教的意識の本領は實にこゝに存するにあらずや。(こゝに謂ふ理性はむねと論理的、推論的、生理的を斥せり。)

宗教的意識若し此くの如く主觀的のもの、人さまぐものなりとすれば、我れ^か威ず、^か意識すといはば、其れやがて究竟至極の事實にして、是非の物論は一切茲に息むべく、個々萬殊の信仰、紛として歸一を見ざるの虞れなきに

あらざるが如し。されど此の疑ひは必ずしも當らず。美の標準、趣味の判断にも、ちのづから一定の客観的規定あるが如く、宗教的意識にも、ちのづから一種の客観的判断のあるあり。吾人はよく高しと感ずる意識をもて、卑しと感ずる意識を批判することを得るにあらずや。(二者の關係を比較する點に、理性の力を要することあるは否むべからずとするも) されば同じく神を感ずと云ふ中にも、其の感じ鹽梅に卑きあり、高きあり、薄きあり、厚きあり、小なるあり、偉なるあり。而して耶蘇の如きは、歴史上少くとも最も深奥に又最も切實に(我等卑き意識に低迷へるものより見れば、殆んど詩歌的表白と思はるゝまでに)神を感じ且つ味へるものにあらずや。

明治廿五年一月

神を感じ、神の力を感じ、神の愛を感ずるは吾人の非理性的方面にあること本論の如くなれども、此く感じたる神と自己との恒久の關係を定むるには、理性の力に須つ所多き、否むべからざるに似たり。されば予は宗教的意識に於ける理性の位置を蔑視するものにあらず、唯だ此にては其の價値の第一戰的ならざるを道へるなり。尙ほ宗教上に於ける理性の意義、職分に關しては『梁川文集』四三六頁「信仰と理性」、同書四四五頁「迷信とは何ぞや」及び本書「病問録」中の「理性」の一章等を参照せられよ。

基督の詩

神人、自然の三才が基督の驚くべき直観と表現とを得て、
 掘みつくし難き豊富の新意義を加へ來たれるは、四福音傳
 に沈潜するものの均しく認むるところなり。基督出でて、
 神は慈眼の天父となり、基督出でて人は一體の同胞となり、
 基督出でて野の百合花は姿高く、空の雀は權威を有したり、
 予は基督傳を繙くごとに其の淋漓の詩趣に酔ふ、而して基
 督の詩と謂ふところ詩人の詩との比較に想ひ到ること屢
 となり。

沙翁、ミルトンを詩人とする意味に於いて、基督を詩人と
 言ひ得べき乎、此く問うて、予は基督の一種特殊の詩人たる

位置に想著せざるを得ざるなり。沙翁、ミルトン、其の他の
 天才は、自家詩人の自覺を有したる詩人なり、其の心の態度
 は、詩人的なり、彼等は詩を作らんとして詩を作り、詩を得ん
 として詩を得たるものなり。基督の態度は詩人的にあら
 ず、彼れは豫言者、救済者、實際家の態度を以て世に出でたり。
 彼れは美に神遊して、之れを歌ふ詩人の位置に立たざりき、
 彼れの心には、最も嚴肅なる實在の存するありて、彼れは之
 れを世に宣ぶるが爲めに、慘ましき血と涙とをそそぎたり。
 而かも彼れの之れを宣ぶるや、言下忽ちにして、金聲をなし、
 玉振をなしたり。彼れは詩人たらずして詩人たり、詩人の
 自覺を有せずして詩を作りたり。一言すれば、彼れは實を
 櫻むと同時に無意識にして詩を櫻みたるなり。惟ふに世

の所謂詩人はた實に觸れ得ざるに非ず、ダンテ、ミルトンの詩は偉なる信念の詩なり。實在の深處に燃ゆる靈火の詩なり。さはれ、是等は詩を得んとして、得たるの詩なり、なべての詩人の目指すところ詩にあり、隨うて、詩人自己の詩情を満足せしめ、其の美意識の需求に合はしめん爲めには、實は時に變色せられ、詩化せられ、徽號化せらる。詩人は詩として、の眞を得んとこそ願へ、實として、の眞を得るとを願はざるなり。是に於いてか詩として、の眞と實として、の眞とは、往々にして空處を生じ、二元に割かるゝの觀をなす。プラトーンが詩を貴きとせらざること(noble truth)といふは、正しく詩の眞と實の眞との間に存する一種の齟齬を道破したるものにあらずや。基督の詩に於いては頗るその趣を

殊にす。彼れまた時に天地の美に恍惚して、覺えず高調の曲を奏でていてたるとなきにあらず。されど、彼れの意識が、要するに實の一字をもて深く刻まれたりしは疑ふべからず。彼れの心には、天父と同胞と神之國とありて、救世の本願常に裏に燃えたり。其の實に觸れて、之れを宣ぶるに急なるや、復た詩人として之れを諷詠するの餘祐を有せざりしと明かなり。彼れは唯だく實を強く、明かに、如實に、世に傳へ、而して世を救はんと力めたり、唯だく實の眞を傳ふるに急にして、詩の眞を得んの念は、毫末も彼れの意識に存せざりしなり。而かも見よ、彼れが實を傳ふる所、詩語、燦として口を衝いて出でたりしを。彼れの眼中には詩なくして、而かも、その信仰は、直ちに詩を織り出だしき。否、彼れ

が一代の傳記其者が實に一篇最高調の詩にあらずや。詩人の詩は動もすれば詩餘りありて實足らざらんとし、其の鏗爾として實に觸れたる者もありても基督の詩は實と抱きて一たり。基督にありては詩と實との間に、二元的空處を容るゝの餘地なかりき。即ち實即詩なりしなり。

こゝに學ぶべき真理あり。按ふに、詩の爲めに詩を得る詩人あり、實の爲めに實と俱に詩を得る詩人あり。實の境は固より詩の境と殊なり、實の眞は詩の眞にあらず。而かも實に觸ること深き程、即ち天地人生の奥に分け入るとの深き程、實は歩々詩と近づき來り、初めは相反目せる仇敵たりしもの、茲に至りては、笑つて手を握らんとす。此くの如き實例は、大宗敎家の意識に見るとを得。彼れは一面、極

めて莊嚴なる實意識を有すると共に、他の一面に於いて、又縹緲たる美意識を縱まゝにし得。彼れは一面にして詩と實との兩面を有するなり。釋迦、基督の深く實在の奥に沈潜するや、思ふに自在に此の境に入したりしなるべく、彼等にありては、信語即詩語、詩語即信語にして、その間に何等の空處をも存せざりしなるべし。哲學者あり、彼は抽象の鑰を把つて實在の秘奥を闢かんとす、而かもその深處に進むや、論理の鎖、抽象の鑰は、忽ちにして破壊せられたる。彼れの眼は、其の富贍の象に眩せられ、彼れの口は、詩的直觀の言葉を藉るにあらざれば、能く一語を著くる能はざらんとす。實の極は詩語を藉るにあらざれば、その萬一をも勞斃する能はざるにあらずや。天地人生の極處は詩、其者也。

而してそは同時に、嚴肅なる實其者なり。

こゝに笑ふべきは、世の宗教を刺る者の語なり。その意に以爲へらく、宗教とは詩的空想に信念の加はりたるもの、即ち虚が實と迷信せられたるものなりと、彼等、宗教に詩趣豊かなるを見るや、則ち解して云はく、宗教は詩的空想、例へば天堂、地獄、神國等を描きて、之れを眞まことと信ずることなりと。何等淺人の語ぞ、殊に知らず、釋迦、基督の實在に沈潜するとの深き、其の炎々たる信仰は、直ちに發して、鏘鏗の詩千萬言をなせるを。詩は彼等が實を味へる、反射なり、信仰の餘音なり、實意識が迫り出だしたる、美意識なり。之れを倒まにして、詩的空想の上に築かれたるは、かなき迷信即ち宗教なりとする解者の言、淺しといふべきかな。此くの如き

は、宗教を侮蔑せんとして、却つて自ら詩其者を侮蔑するものなり。詩そのものが全く實と沒交渉なる空想一偏のものにあらざるをや。

明治三十四年一月

悲哀の高調

音に歡樂響きて哀情の生ずるのみならず、高歌盛舞の歌吹海の中にありてさへ、吾人は時として、中心無限の寂寞に泣くとあり。吾人は時として爛漫の花に泣き、又得意満盈の幸運にさへ泣くなり。而してこの悲哀は、時としては、俗にいふ『嬉れし涙』のたぐひとは異なりて、人生其者の如く深さとあり。思ふに如是意識は、必ずしも厭世家ならざる人の屢々経験する事實なるべし。

この悲哀の意識は何物ぞ、極めて漠然として、而かもさしも深く、切に、人心を動かすこの悲哀の意識は何物ぞ。これは勿論種々の解釋を容るべき者なるべし、之には、そを一種

の宗教的衝動より來たるものと見て解釋を下ださんとす。手は少くとも、こゝに有力の一解あるを信ずるものなり。

吾人の有限、缺陷、小弱、あさましさ、wretchednessを意識して、そのことも知らず、一種我以上のもの、有限以上のものを向慕渴仰する、これ即ち吾人の悲哀の湧きいづる主源頭にはあらざるか。こゝは勿論漠然たる意識なり、されど反思一番すれば、吾人の悲哀が、時として此かる一種の對照、一種の無限渴仰の意識に深く根ざせることあるは、否むべからざるに似たり。この一種の意識の失せざる限りは、悲哀は永へに失せ去らざるべし、悲哀は實に人生の根調なり。この悲哀は必ずしも虚無寂滅を觀ずる消極的悲哀にあらず、それは寧ろ無限者慕はしさの悲哀なり、神を求めて得ざる悲哀なり、た

としへなき要求の歎きなり、言ひ知らぬ心情の祈りなり。されば吾人は、かのミトラや、パールや、甚だしきは木石鱗の頭に對してだに、一心の誠を籠めて、合掌持念する姿の中に、屢々高調の詩を見るなり。固よりこれに理性の解剖刀を入るれば、當の人の動機、及びその崇拜の對象に、さまざまの迷信不經の混在せるを見るとあるべく、中には、迷信の塊其者と見るべきものさへあるべけれど、而かも唯だ一事、その有限小の身を舉げて、超有限者に打まかせ、依りすがりて、自己を大靈の前に燦き盡くさんとする歸依の眼、敬虔の姿は、吾等が至深の要求の影をこゝに認めて、覺えずこれに同感の掌を合せ、同心の祈願を捧ぐるを禁ずる能はざらんとするなり。もとより、惡むべき利己一偏の神いぢりさへ世に

は多かれど、所詮、彼等は求むべきものを知らざるなり、見誤りたるなり。我等はこの迷謬の意識の中にだに、人生根本の悲哀の髣髴として動けるを見ずんば、あらざるなり。

悲哀の最も沈痛なる特殊相は吾人之れを人生の道德的戰場に見る。何人か此にては、罪業の深手よかてに鮮血淋漓たらざる、何人かこゝにては、まばく尊者ポロと共に「ああ難める我かな」の歎なきを得ざる。人の理想を追ふとの無限なる限り、新たなる罪業の血痕は常に絶えざるべく、而して尙ほ誰れか、我は神を要せず、佛を頼まず、我れに理性のあるあり、以てよく我が痲痕を襲みて之れを痊やすことを得るとは言ふものぞ。我等は曾て理性に向つて、罪業の痲を痊やさんことを求め、而して理性は輒ち、爾の善業を積んで

之れを賄へ」といふと峻嚴に應へたり。我等は奮然起つて、再び健闘の途に上れり。再び傷痕を被れり、再び理性を呼べり、而して理性の應ふるに故の如し。嗚呼、々々、人は理性の自恃以外に、何物をも要せずと言ひ得るほどに、至醇なりや、至疆なりや、至大なりや、至大、至醇、至疆のもの、我れの衷にありとは自知す。而かもそは現實の我、經驗の我を超ゆること常に百歩す、我一步を擧ぐれば、彼亦一步する也。現實の我は、依然として踰跲たり、蹒跚たり、依然として躓く也、傷く也。嗚呼、理性の力は偉也、されど理性は果たして、我等が罪業の血潮を名残なく拭ひとる程の力を有する乎。理性の聲は嚴厲なり、そは正義の聲なり、そはエホヰ神の聲なり、そは目もて目を償ふ公正律の聲なり、我等は屢々涙を以て

理性に訴へたり、されど理性は涙を以て之れに應へざるなり。されど我等は果たして、我等が性の脆弱より來たる無限の罪業をば、ことごとく善業もて償ひ得べしや、理性は依然として、「然かせよ、然かせざるべからず」と命ずる也。その峻嚴一步を假さざる超現象的權威に面するもの、誰れかカントと共に、肅然として襟を正さざる、げに、この莊嚴なる聲に起つて、無限に煩悶しゆくところに、沈々として聲なき人生の大いなる戰はあるなり。我等は「完全」を望んで何處までも向上すべし、何處までも「struggle onwards」すべし、我等は、ポーロ、アウグスチヌス一流の贖罪説の秘義を頼みの綱と打継らざるべし、我等は羅馬舊教ぶりの聖權主義を力の岩と頼まざるべし、これ實に男らしき丈夫の態度なり。

されど我等は尙ほ、罪業の深き傷痕に泣かざるを得ざるなり。これ何が故と問ふと勿れ。これ實に、理、性、の、理、解、す、る、能、は、ざ、る、悲、哀、な、り、理、性、の、同、感、以、上、に、超、す、る、悲、哀、也、誰、れ、か、この涙を女としとはいふ。天真の悲哀を神に打出して泣くは、勇士の態度にあらずや。

「世に義人なし、一人もあるなし」、釋迦、孔子、基督の偉を以てするも、疑ふらくは、玲瓏一翳を著けざる境にありきとは言ふべからざらむ。基督無罪論の如きは、畢竟我等に對しての比較論たるべきのみ。されば、まして我等庸人をや。何人か果たして、其の道德的理想に罪を負はざる、勿論、我等は、善業を積んで、之れを贖はざるべからず、何處までも贖はんとして進むべき也、これ我等が道德的要求の聲也。されど、

假しこれを償ひ得たりとするも、これにて自ら足れりとせんに、尙ほ餘りに深き要求あり、餘りに深き涙あり、我等が胸臆の深處には、我等が他の罪を恕るすが如く、我等の罪を恕るしたまへ」この、かすかなる叫び聲さへ、聴取せられざる乎。是くの如くして、我等が根本の悲哀は、實に倫理に宗教の高調を帯ばしめずんば、^己まざらんとす、こゝにては、向きの道德的理想は、吾等が限りなき悲哀を訴へ、限りなき歸依の涙を打そ、ぐ神とはなりぬ。理想を神とするは、吾等が至情の結論なり。

一切の成立、宗教の中にて、神の如きは、特に自己、即神の光耀の一境、即ち悟に重きを置く。されど、悟豈容易ならんや、こゝに到るまでには、神人無限の離隔を超越し盡くさざる

べからず所謂豁然頓悟は極めて壯快なるべし、されど頓悟の底には、思ふに不盡の悲哀あるべし、まして悟の意識超越の意識は、長久に持續せず、遽然として我に歸れば、依然として神はかしこにあり、我れはこゝにあり。依然として、我は神(眞如、法性、自性)との離隔の悲哀を味はざるべからず、依然として茲に歎きあり、忻求あり、向上あり、祈願あらざるべからず、依然としてこゝに一種の感應道交の消息なかるべからざる也。吾等はどこまでも一面有限者也、隨つて又有限者以上の實在者との感應道交なかるべからざるなり。一切感應道交を要せざる程の超人的無限者となり了するは、吾等の分にあらず。されば吾等をして祈らしめよ、感應道交せしめよ。而してこれ即ち單なる自力以上の消息を含

めるものにあらずや、こゝに神(佛)の恩寵の語をさへ、まじへ加ふとも、縁遠き語にはあらざるなり。但だし禪の排情觀は、知的超越の一境、即ち寂然照著をいふに登らいっせにして、その茲に到る根柢の悲哀を言はざるのみ(禪は理性の力をのみ頼むが故に、ともすれば高慢なる野狐禪となる)。或は云はく、禪には、悲哀の涙を打そぐ人格神なしと。この言當たれり。されど、人格的の神、まづ客觀に存するなくば、吾等が悲哀を訴ふる所はなき乎。然らず。見よ、吾等が宗教的要求は、その觸るゝ所、隨處に春温を生じ、生命を現じ、感應の力無限なる對象を造り出づるにあらずや。則ち造るといふといへども、其は主觀のすさび以上也。それ至深の要求は、同時に實在也、至深の主觀は、同時に客觀也。世俗謂ふ所の

人格神の有無は、こゝに問はず、たゞ人生の根柢に潜める神人離隔の悲哀感は、吾等をして無限の感應々化力を有する實在者に觸れしめずんば已まず、而してこゝには復た神の人格非人格の稱謂如何を問ふに遑あらず、心靈の事實は一なり。

宗教は感應也、而して感應は悲哀より來たる、理性の自力自悟を特色とする禪だに、又實にこの一種感應の關係を全く疎外する能ふまじく、而して、これ即て單なる自力以上の消息を語るにはあらざるか。感應道交なくして、一切の宗教はあらず。悟とは畢竟神人離隔の悲哀に打ち勝ちて、之れを超越したる刹那の意識を斥す言葉にあらずや。

人の性の偉大は、この世界大の悲哀に觸るゝにあり。吾

等が神に對して打瀝ぐ祈りの涙、世にこれほど深奥なる詩と實在とを一にしたる高調の涙あるべしや、吾等はこの涙の中に神と相見るなり、吾等はこの涙によりて、自矜自大の小我見を解脱することを得るなり。げにかゝる悲哀を有するは、人生の不幸なるべし、されどこの不幸を和げ慰藉するものも、亦この悲哀也、涙也。如何なれば今の世は、強ひてこの涙を抑へて、矯飾自ら高うせんとはする。寧ろこの至深の要求を打出して、これに適當の位地を與ふる所に、人性の赤裸々露堂々たる天真の姿をば見るべからざる耶。

我等衆生をして、この漠然たる悲哀を明かに意識せしめよ、而してこの中に無限の慰藉を見いださしめよ、これ實に世の仁人君子、宗教家、先覺者の慈眼愛腸に須たざるべから

ある也。

(昭和二十五年一月)

一家言

詩を讀みて當然起り來たる美意識以外、心はいつしか、一步その奥を辿りて、覺えず實在と撞著して、嗚呼神よと叫ぶとあり。神に一念の誠をさゝぐる刹那、心はいつしか歎美の態度にすべりて、あはれくと風月の情をとりなるとあり。詩よりして神に之き、神よりして詩に之く。是くの如きは、通りふかき人の經驗する事實也。意ふに詩と神と、大源一也。有象有形に執する詩人、もし一たびその根柢に深潜せば、肅然としてその權威にぬかづくべし。宗教家もし、神の姿を分明に描出せんとせば、則ち彼等が機根さまぐに、如來と現じ、天父と顯はれ、慈悲と垂れ、光明と輝き、あるは

天上清輝の星とさゝやき、あるは離落微韻の花と點ずべし。詩を無限に緝けば、實在の神となり、神を有限に緝りいづれば、縹緲の詩となる。詩は直ちに神に薄り、神はまぼろに詩を返照す。げに詩人と宗教家とは、宇宙を家とする最も親しきはらからなりけり。この二人を一身に合はせ撮めて優なるもの、プラトーン、ダンテ、ミルトンなどを始めとして、世に鮮なからず。耶蘇のごとき、その最大の一人也。

芭蕉は一俳人也。されど、五十年の生涯を自然の渴仰にさへげて、あるは奥羽象潟の時雨に腸を絞る、あるは佐渡北海の荒波に魂を削りて、一樹の假の宿りにも、とくくの雫結びもあへず、旅魂をどろに枯野の風雲を追へりし彼れが姿をまのぶもの、誰れか、その魂に鑄られたる實の一字を否

むべき。彼れは自ら謙して、花鳥に情を役して、この一すぢに繋るといへり。まかも、行々まばく、大自然の幽玄の一路に分け入りて、覺えず涙下りしその意識よ。あはれ、彼れは趣味の門より入りて、趣味の太源に道交しぬ。かくの如くして彼れの俳はじめて俗ならず、浮ならず。こゝに芭蕉の宗教ありといふ、これをしもわが好める筋に俟したる言なりといふべきか。更に想ひいづるは、彼れが同じ風雲に思を碎ける及門一味の友と、淺からぬ心情を汲みかはしし一幅の景なり。古希臘哲學者の秘密結社、あるは印度初代佛教徒の僧伽の熱情の片影さへ、こゝに見ゆる也。

傳ふる者曰はく、今の美術家中、雅邦は丹青以上の活機に神交せりと、この言もし真ならば、雅邦亦技よりして道に

入れるもの、又以て卓然たるものと稱すべし。吾人は、必ずしも詩人に迫りて神を見よといはず、唯だ詩魂の雄なるものは、この一境、本地の風光に見到せざるを得ざるをいふ。言ふ勿れ風流三昧と。大詩魂の風流三昧の奥龕には、嚴肅なる實在の、不斷の燈を點ずるありて、その一刀一筆は、直ちに一跪一禮たる沈痛の消息あるなり。その Work は直ちに Worship 也。是くの如くにして、詩歌ははじめて全人と渉る。是くの如くにして、美術は始めて實在其者と觸るゝとを得。崇いかな詩人の位地。吾人は、詩歌以外に、本領ありと傲語せしバイロン一流の識見を淺しとす。

吾人は、又神を拜してその詩的一面を閑却する宗教的意識を淺しとす。今人の神は餘りにモノシステック也、リ

ゴリステック也、峻峻の相勝ちて、詩的溫脾の韻缺けんとす。彼等は率ね神を倫理的に見るに偏して、その詩的一面を見ず、むしろ神を美的に見るを不敬冒瀆の事となすなり。曰はく、神豈月ならんや、花ならんやと。今の教壇に立つて神を説くもの、唯だ其の聲を大にして、勢ひ猛にのゝしるのみ。知らずや、神には、世の所謂宗教家の雄辯宏辭をもて説き去り盡くす能はざる無限の詩趣の氣海香國と漂ふものあるを。われは、まば／＼今の宗教家がその神を説くを聴きぬ。そは譬へば、張子の虎の如し。嗚呼神豈説き易からんや。神には實に、絶倫の詩才を以てするも、尙ほ歌ひつくしがたき神祕の詩趣あり、微韻あり、含蓄あるなり。われは、今人の枯瘦の神に與みせずして、むしろそのむかし、ガラリヤ湖畔

の夢の如き牧歌的風色の中に、おりたちまじし神を志のぶ
なり。げに耶蘇は、偉なる宗教魂と、詩魂とを併せたり。耶
蘇の神は、倫理的正義の神にして、又ソロモンの榮華を羞か
しむる野の百合花の美しくしき神なり。なほ見たし花に明
けゆく神の顔。プラトーンは、かくの如き美しくしき神に、そ
の戀をさゝげにき。

嗚呼、詩と神と、詩人と宗教家と、最も親しかるべきは、ら
らにして、而かも今日の如く睽離反目せるは、あらざる也。

明治三十五年九月

爐邊枕頭

眞理の空名

人情を離れ、社會を離れ、國家を離れ、一言すれば、人生、其者
を離れて、尙ほ眞理なるものあるべしや、眞理の權威なるもの
のあるべしや。世に眞理の空名に酔うて、高しとするもの
あり。壯語していふ、我が所謂眞理の眼中より見來たれば、
人生深しとするに足らず、國家重しとするに足らず、人情美
はしとするに足らず、否、人生や、國家や、情誼や、文明や、すべて
是等のものは、畢竟我が所謂眞理に參與して、始めて意義光
彩を有し來たる、我等が跪拜頂禮する神は、唯一個無等々

の真理あるのみと。是くの如きは世の一部の宗教家等が自己の尊信する經文聖典の真理を辯護する場合又は其の所謂真理が國家と衝突し、文明と逆行し、もしくは人情と相合はざるものとして世間より攻撃せらるゝ如き場合に於いて、特に勵聲一番して颺言する所也。

されど是等の言葉は、真理に對する一個の主張もしくは辯護として、何ほどの意味を有するぞ。予輩は、人生以上、に真理の存在を托せんとする如是主張に對しては、唯だ會と約翰傳記者の道ドモスもしくはプラトプラトンぶりの理想イデアなどいふ超絶哲學的思想と聯想して、一種の興味を感ずる外、また何等の教訓をも得る能はざる也。畢竟するに是くの如きは、彼等が真理の人生内在の意義を忘れて、若しくは知らずし

て、強ひて之れを人生以上に引き上げたるもの、即ち自家信奉の真理に無上莊嚴の權威を附せんとして、却つて之れを實在と縁なき抽象枯瘦の空名となし了れるものに外ならず、猶ほ彼の忠君愛國の眞意義を盡くさざる輩が、忠君愛國の空名其者に、一種何等かの神聖なる意味あるが如くに怒號して、而して自己が偽忠君、偽愛國の偽善者たるに氣づかざると一般也。彼等の語や高きに似て、意は極めて空疎也。予輩の見る所を以てすれば、真理は其の如何なる性質のものにても、究極する所、テレオロヂー即ち一種の有極觀、目的觀を外にしては、其の意義を悉くす能はず。吾等は、人心の要求に根ざして其處に華さかざる真理なるものあるを考ふる能はず。最も客觀的と稱せらるゝ、自然科學上の眞

理だに、人生の要求を離れては、究竟の根據を有せず。吾等が通常事物と稱し、若しくは事物の必然性、恒有性と稱するものの如きも、その究極の意義を叩けば、要するに此の大千世界の無邊の恒砂中よりして、特に吾等が關心の對象となれる一漚一沫を掬ひあげて云々せるに過ぎず。吾等の主觀に最も多く興味を惹き起こすものといふ一義を外にして、物あらず、性質あらず、必然性あらず。一切の事相詮じ來たれば興味圏中の附名のみ。自然科学上の真理だに、既に是くの如き性質のものなりとせば、まして人心の華ともいふべき宗教上、道德上の真理に於いてをや。この場合にいふ真理の内容を填するものは、人心の最主觀的事實たる情意之要求、其者といふも決して過言ならず。情意の要求を

蔑如し、若しくは之れを満足せしめざる真理といふが如きは、矛盾語のみ、逆理語のみ。されば、真理ありて人生あるにあらず、人生ありて真理ある也。真理に人生を左右するの力あらずして、人生に真理を左右するの力あり、人は真理の主也、奴隸にあらず。真理(特に宗教上、道德上の真理)は、一派の人の信ずる如く、外より法則として、人を壓し又は縛るものにあらずして、内より人心が自家目的もしくは其の一部として、造り出だし、掲げ出だすもの也。

真理の有極的意義、此に於いてか見るべき也。かばかりの事、特に辯ふるの要なきに似たれど、世の堂々たる宗教家にして、自家信仰の隠れ家をかゝる空名の真理に求めて、無意義の言をなすもの間、あるに想到して乃ち此の言あり。

予輩は、此かる人生以上、の空名、の眞理を唱ふる輩に對つては、ピラト當年の嘲語を藉りて、眞理とは何ぞやと問ふを禁ずる能はざる也。

學究と獨斷

眞理のテレオロヂーを離れ、人生的意義を離れて、其の一枝一葉の穿鑿に縷析の論理三昧を事とするは、所謂學究者流の常、彼等は生命の響き温かなる眞理をも、忽ち机上の死葛藤となし了らずんば已まず。さりながら、世に若し口を極めて學究の態度を罵倒しながら、自家は浪讒理に無頓著なる我れも、もしろの一時の思ひつき、氣まぐれの好惡沙汰、乃至は輕浮なる其の折々の抒情的放言を物して、我れこそ

眞理の宣言者なりと名宣る如きものあらんか、予輩はまた何等の辭を用ひて之れを評すべきかを知らざる也。眞理は獨斷にあらざる也。

想ひ出づるは、英國の名士デモンモレーが、カーライル誕生百年祭に物したる紀念演説の一節也。その要に曰はく、カーライルは到底事に關して明確なる見解を與ふるの人にあらず、彼れは複雑なる問題に對して堅忍之れを裁するの能を缺く、當時熱心なる一群の巡禮者は、チェルシー(カーライルの住處)を去つて、ブラックヒースにミルを訪ひぬ、そこには、ミル、精勵、忍耐、宏量を以て、眞理の研究に従事し、而して眞理を求むるの容易ならざるを知れり、而してこれ實に、カーライルの知らざりし所なり、カーライルも亦眞理を

求めたり、而して彼れは唯だ眞理の毛髮を握みぬ云々。寧々たる數語、而かも何人か二家に對する此の確論に背かざるものぞ。嗚呼、一代の豫言的天才カーライルの直覺を以てして、其の冷罵熱叫の著書、等身を以てして、而かも尙ほ、モレーをして如是評言を敢てせしむ。想ひ見る、カーライルがその宇宙の中心より直上噴騰する如き熱沸々の千語萬語を一瀉し來たるや、恰も噴火山上萬道の火光の、炎々として人天を照破するの概ありしを、而かも其の能く久しからずして、冷化硬化の熔岩の磊々山下に堆をなして横はる如き一種の運命に遭ふを免れ得たりしや否や、我が噴火山的天才の噴火山的直觀の語は、果たしていかほど不滅質の眞理として後代を盛飾し得べしや否や。翻りてミルを見

る、カーライルが論理學の無能を罵りて知識は神祕なり、最良の論理 Best Logic 尙ほその皮一重を囁ハヤすハヤと痛言せりし傍らに、ミルは孜孜として、其の歸納論理の著に従事しぬ。カーライルが經濟學を惑星以外に放逐すべしと怒鳴り立てし時に、ミルは屹々として、其の經濟學の孜究に埋頭して、永へに斯學の基礎を牢うしぬ。カーライルがペンザム一家の功利主義を嘲倒して、之れを苦痛と快樂とを衡る草秤くさびかりに譬へたりし折に、ミルは徐ろにその「功利説」の名著に心血を灑ぎぬ。前者が盛罵痛詆の中に盛れる達觀の眞理も、とより拾ふに堪へたるものありといへども、後者が冷頭平心、悠揚迫らず眞理の求めがたきを、知りて堅忍以て之れに當たれる學者的雄姿こそ、更に貴くも亦ゆかしからずや。必

ずしも、一を揚げて他を抑へんとはあらず。我等唯だ、眞個の意味の學究的態度を敬するを、知れば也。

白首紛如として、黃卷堆裏、一爲すなき世の學究先生を罵る、必ずしも不可ならず、されど予輩は、眞個の意味の學究先生に對しては、そゞるに尊敬の念を禁ずる能はざる也。古より代を累ねて築きあげたる科學上哲學上の眞理の大寶藏は、概ね偉大なる學究的努力の結果なりと知らずや。予輩は彼の一個の蟻樓蜂衙の研究に一生を抛ち去る學究先生の中に、だに、また實に他の門外漢の想像の及ぶ能はざる融々無限の樂地と意義とあるを看取せずんばあらず。要は唯だ其の研究を將て人生的意義に總攝するにあるのみ。予輩は直覺の貴ぶべきを知る。豫言的天才の直覺の更に

次に貴ぶべきを知る。たゞ世の定見なき青年の徒が一代の惡風潮を追うて、漫りに論理を無視し、組織的研究を罵斥して、放浪自恣の壯語に一時の快を買ふを非とするのみ。予輩も亦謂ふ所の躰達、若しくは實證、もしくは身讀の一義諦を外にして、究竟眞理參究の道なきを知る。宗教上、道德上の眞理に於いて、特に其の然るを知る也。自己を離れて神なし。深く自家心情の一路を辿りて、そこに眞理の泉を鑿ち當てざる者が、神をいひ、道をいふ、畢竟何の詮かあるべき。一個心情の泉は、優に眞理の萬水を漚して、餘りあり。風雲月露も、黃卷赤軸も、汲みつくしがたき我等が心情の要求と結びて、はじめて眞理の活註脚たるべし。此の理極めて明々。さはあれ、予輩はかの心情の倭者を憎む、直覺の美

名の下に眞理を誣ふるものあるを憎む、心情の要求に媚びて、他の理性の要求を蹂躪する者あるを憎む。自家心情の奥に眞理の門を叩かんほどのものにして、一面直覺の手を以てすると共に、他面また論理の鍵もて之れを開くの誠實と用意とを疎んずるが如きは、予輩の煩る解しがたしとする所也。けにや、心情の要求と理性の要求と、此の一個の調和問題は、血と涙とを以てするにあらざれば、解釋し難き者あるべし、而かも我等は、尙ほかゝる苦痛を賭しても此の一間を解くにあらざれば、中心つひに安からず、理性の要求の勃如として抑へがたき者あれば也。若し、人あり、偏へに心情の要求に許して、理性を蔑視し、若しくはそを心情と調和せしむるの苦痛を恐れて、只管心情の蝸中に閉ぢ籠もらむ

か、此くの如き人は、眞理戦場の敗者か、然らざれば未だ眞の自覺を以て、この一間に面接せざるものといふべき也。一派の人々の信ずる如く、理性は萬能にあらず、理性は事實を供せず、信仰を造らず、理性は心情が立し來たる事實を破するの能を有せず、而かも件の心情の立し來たる事實、信仰をば一種確實の者として、これに或究竟の是認を與ふる者は、竟に復た理性の力に歸すべきならずや、心情の要求が掲げ來たる眞理に對して、唯と不可思議の眼をもて之れを打ち仰ぎながらも、而かも尙ほこれに相當の存在權を認めんとするが、取りも直さず理性そのものの誇りにあらずや、是くの如く、心情の要求に究竟の是認を與ふる理性は、通常謂ふところの狹義の論理的理性以上の者なるか否かは、茲に論

ずるの違なし。所詮、心情の要求なるものは、一面何等かの形にて、理性の究竟の一諾を経るにあらざれば、客観的權威を有し來たらず。而して此かる客観的權威を得て、主観の絶叫はじめて孤ならず、弱からず、淺からず、泣言ならず、堂々として實在の響きあるべきなり。予輩は謂ふ所一念三千の觀法に妙なからざる興味を繋ぐもの、唯だ是くの如き真理の、一面どこまでも客観性と併行すべきをいふ、而して此かる客観性の究竟理性の權威に須つべきをいふ。一代學究の弊は、論理を無視する獨斷の盛罵を以て救ひ得べきにあらざる也。

「あまたたびの歎息を以て真理を求めよ」とは哲人の我等に教ふる所、あゝ真理は決して求め易き者に非る也。(大體三十一)

秋の力

「あれこれをあつめて霞む春の朧ろを、人生の夢とも見ば、秋は直ちにこれ覺醒也、事實也。 蔦紅葉の中より露はれいづるふしくれだちし樹身、枯芝生の底より躍りいづる偃蹇たる雲根、いづれか秋は人に迫るの事實たらざる。 中にも秋の力を最も強く膽かに言ひいづるものは、黄柚也、赤柿也。 一美術家語りて云はく、われ曾てひねもす秋を郊外に探りて秋に會はず、歸路會々、夕空鮮かに結び出でたる赤柿の累累たるを見て、始めて秋こゝにありと叫びきと、げにも、秋の姿をさながらに具象にして描き出だせるものありとせば、そは碧落の空に躍如として結び出でたる赤柿を措きて

はまたとあらず。秋は實に個の累々の赤柿に其の全幅の表現を得たる趣あるにあらずや。そのむかし、蕪村抱一などいふ畫家が寥々たるこの一物に、大膽なる落想をこめて、一幅の秋のこゝろを勁く隈なく淋漓揮灑し出だせる、詩眼流石に凡にはあらずりけり。

見よ、秋の漚に淵黙の智あり、秋の空に剛明の象あり。月は清輝を帯び、星に聲あり。落葉に埋もるゝ枯井の水、なほ鬢眉を鑑すべく、夢を歌ふ満園の蟲しぐれ、人の深省をいさなふ。空際ははやかに走る波濤の山、極目鮮かにくねる一河の帶、樹間の聲の銚々として勁き、天嶺地嶺の碎湃として厲しき、あはれ、秋の萬象、何物かすべてこれ空明照徹、剛克雄健の一氣を以て貫かざる、何物かすべて、哲人の雄姿、道士の

風岸を以て人に迫らざる。秋は夢に非ずして、事實也。人は秋に立つて、直ちに事實と面相接する也。秋は何等の天文地采の形式を繕らざる、裸体のまゝなる思想也。其は如々たり、故に明瑩也、澄徹也、而してまた充實也、豐贍也。春草の紗、夏木の衣、すべて名残なく脱ぎすて、あらはなる葛蘿の筋、樹幹の骨、健くもまた雄々しき丈夫神の面影は、げに秋にこそふさはしけれ。もし、秋に一味の文采ありとせば、白蘋紅蓼の裳、蘆花淺水の帶、桔梗、刈萱、尾花が波の、袂も輕き姿なるべし。あはれ、其の澹如たるすゞしさは、かの哲人道士の婆娑たる一衣の高風にも似たるかな。至竟、秋の力は、其の衣にあらずして、赤裸々の事實にあり、思想にあり。

苦痛と解脱

(病鶏を傷みて)

我が家の一羽の庭鳥いとたくましが、偶々劇しき熱を病みて、秋の一日の華やかなる庭面に、黯澹たる影を投げぬ。彼れは、刻々潮し來たる焦熱の勢に抗し得て、尾羽打ち枯らして、悄然庭の一隅に立てり。如何なる縁しのあればか、藥爐の室にわが世の秋のわびしさを觀じつゝある我は、そゞろに庭上の孤影に心動きぬ。あはれわが友、淺ましうも打衰へたるかな。昨日までも光榮の華冕打翳して、曙の歌勇ましう、洋々乎として、王者の徳、文明の盛を聲らしつる雄姿、

今何處にか認むべき。昂かりし頭は、俛れ麗しかりし冠は折れて、燃えのぼる満身の炎に、土の如き黝色傷ましく、風を嘲りし兩翮は、萎みて影の如く、敵を挫きし爪嘴は、拳曲して力なし。生氣光澤、人に迫るの力ありし渾身の羽毛は、空しく枯葉を束ね、双の清眸は一たび萬有より閉ぢてまた還らず。昂然濶歩の疇昔の姿、永へに庭上に消えて、身邊唯だ見る死影の蹒跚たり、蹣跚たるを。嗚呼、汝傷心の姿かな。さはれ友よ。苦痛は汝一人の事實なりと思ふこと勿れ、われまたこゝに、日夕枯瘦の影を撫して、秋に泣く身ぞ。誰れかいふ毛翮の物と。觀ずれば同じ法界一味の汝と我と、やがては色身の籬撤して語るべき身のげに免れがたきものは三界の生死流轉也。さればわが法界の友よ、悲哀は汝一人

の有ならず、我にも、所詮は飲み干さてかなはぬ悲哀の杯あるものを。汝と我と、人生の悲哀をこゝに集めて、我は汝の中にわが悲哀を見、汝は我の中に汝の苦痛を見る。嗚呼々々、かくして汝と我と、刻々死といふ大魔王の威力の前に、屈服しつゝ、跪きつゝ、喘ぎつゝ、苦しみつゝ、歩一步暗黒無邊の底に沈みゆくなり。見よ、生即苦の三界の大事實はこゝに我等が前に、一切を後景として、火の如く躍現せるにあらずや。冷かなる「死」の遍在力は、今や一粟の有情物に、其の宇宙大の威力を集沖し來りて、直ちにその存在の根を衝破し粉塵せんとするならずや。哀れむべし、我等が衰殘の友は、此の大勢力に抗して今一たびを戦ひぬ、されど其の眼は再び開かず、其の首は再び觸らず、其の冠は再び觸らず、其の兩

脚は再び砂を蹴らず。苦痛は一切を黙せしむ。我等が前には大地消え、萬有失せぬ。垣根に笑ふ花、庭面に戯るゝ狗兒、晴をよろこぶ鳥聲、露をたのしむ蟲語、日光、樹影、空色、水聲、すべて一様何の有る所ぞ、有る所は、生死大海の流轉のみ、苦痛のみ、悲哀のみ。唯だ、此の沈痛なる一事實あるのみ。友なし、親なし、君なし、神なし、國土草木なし。嗚呼、汝と我と、かくして遂に滅びゆかんとする乎、つひに滅びゆかざるべからざる乎。

見よ、わが有情の友は、遂に此の自然の大破壊力の一撃下に脆くも沈みぬ。同時に我が自覺は忽然として此の恐るべき同感的苦痛の威壓より反跳しぬ、覺醒しぬ。我れは叫びぬ、嗚呼、我等も亦かくして遂に冷かなる自然力の暴殄の

下に寂寞として墳墓に下らざるべからざるかと。されどわが自覺は、斷乎として答へたり曰はく、死の苦痛と共に、其の自覺を有せざるものは、解脱なくして眠るを得べし、されど苦きく死の苦痛の自覺を有する我等は、解脱なかるべからず、又實に解脱の權能あるべき也と。嗚呼これ何等天來の福音ぞや。わが有情の友は、解脱を要せずして今や逝きぬ、されど我はつひに解脱なかるべからず。解脱あるべき也。嗚呼これ何等祝福のおとづれぞや。

誰れか、死に面して苦痛の崇高を感ぜざる、而して誰れか亦、死の解脱力の吾等にあるを自覺して慰藉の崇高を感ぜざる。"sublime sorrow, sublime reconciliation" げに人の脆きは、風にも傷む一もとの葦也。而かも其は考ふる葦也。嗚呼、考

ふる葦の一語、世に是れよりも人の偉大と高貴とを道破し得たるいみじき言葉あるべしや。それ自然は、其の強大を挾んで眇爾たる吾等に蒞じ、而かも吾等は、むしる、吾等の小弱其者を光榮とし、誇らしとする一個の或物を有するならずや。パスカルは更にいふ、人の孱弱其者その偉大を證すそは無冠の帝王の孱弱也と。げに、古へより千載の士は、自家の弱きを頼みて帝王たり、死を味うて勝利を叫びたり。此に至りては、彼の希臘の古哲人をして神怒よりも尙ほ怖ろしと感ぜしめたる自然法、因果律の冷酷無慈を以てするも、尙ほ能く何爲るものぞ。吾等の解脱は、能く吾等をして因果を甘しとさへ味はしむる力を有するならずや。因果の鎖は解脱哲學を縛る能はず、生死巖頭の自在を奪ふ能は

ず。因果は一葦の我を殺すべし。つひに一葦の自覺を殺す能はざる也。因果は曰はく「生は即て死也」と、自覺は曰はく「死は生の術也」と。因果は曰はく「汝は自然の一粟也」と、自覺は曰はく「自然は我心の一波一浪也」と。因果は曰はく「自然に従はざるを得ず」と、自覺は曰はく「當に自然に従ふべきなり、これ即ち上智也、最勝善也」と。此くの如くにしてマホメットは「イスラム」即一切服従主義を樹てて、神に冥合し、此くの如くにしてスピノーズは、萬物靜觀の法悦を享受しぬ。「我れ法王となつて法に於いて自在なるもの、彼等在焉。彼等の解脱力は、よく因果そのものを我が當行の則となし、萬法善也」と叫びぬ。彼等は因果以上の原理に躋舉して、因果の枯野に祝福の花を開かしめぬ。彼等は因果に死して神

に生きたり。

嗚呼わが法界有情の友、汝は苦痛といふ因果の下に永へに沈みゆきぬ。されど解脱を要せざる汝の一死幸か、解脱を要する吾等の一死幸か、すべて神ならぬ吾等の如何て知るべき、唯だかりそめならぬ縁しの一日を、我が進脩の機たらしめし汝の一死こそ、貴き善知識にはありけれ。ねがふは平和の神、永へに汝の眠を護れかし。さらばなり、我友。

明治三十六年一月

答道友書

拜復、小生の宗教的經驗とや、固より幼稚未熟の語り候とて兄が進益の資となるべうも候はず、但し御疑念の條々に關しては、兼て聊か覺悟致候事ども、簡短ながら左にお答へいたすべく候。御一讀の上御取捨下されたく候。

貴説の如く、或意味に於いては一切の有情物亦皆宗教的要求若しくは衝動を有する者に候べし、但だ此の要求の自覺を有するは、我等人類の特權なるべく候。我等世に出て、富も、力も、智も、名も、紫綬も、紛奢も、乃至は友も、師も、家族も、社會も、尙ほ醫する能はざる靈魂無告の寂寞の感を抱くは、何等の深因縁に候ぞや、此くの如きは他くとを知らざる靈

魂の中心を咬む事實に候也。げに多くの偉大なる靈魂は、此の一種の孤獨、岑寂、不満足の感を抱いて、煩悶自ら安んずる能はず、彼等は天地の實在者を尋ねてこれに會はざる間は全人世を荒墟しんぷの如くに歩み候也。

宗教的要求は實證、もしくは感應、其事とは別ならずやとの御疑念、一應はさる事ながら、小生は要求と感應とを全く別の事とは存ぜず、自分の經驗によれば、醇なる沈痛なる宗教的要求あれば、感應は自づと其中に含まれ來るやう存ぜられ候。中心至切の要求を有するとに於いて、我等は既に臙げながらに神に觸れたるものに候。少くとも要求は感應の始、感應は要求の終、二者終始して無端の一環をなすとも申すべくや。思ふに要求と感應、二者相關の理ほど、人生

一切の境に於いて、沈痛火の如き事實と現じ候者はあるまじく、知識も詰まり要求の所産也(窃かに思ふに知識、又は真理の顯現と吾人心性の要求との關係には、知識哲學を教ふるに足るべき深根柢可有之候、美術も詰まり要求あつて神來あり、感應あるにて候。少しく餘事に涉り候へど、我等が真理や藝術に對して有し能ふ態度は唯だ、戀人に對する如き切なる思慕要求の情のみなるべく候(語の詩的なるを許せ)我等は唯だ、真理又は藝術に對する醇なる思慕(せんぐ)祈求あれば、之れに應じておのづから真理來たり藝術華さくても、個の意識上の事實あるを経験するのみに候、其の如何にして、何處より來たるかを知らず候。要求は我等分内の事なれども、感應は神の恩寵に候。感應の來たるや神祕也、唯

だ我等が要求の聲に應じて忽然として其の前に參し後ろに立つを見るのみに候。我等は唯だ之れを意識の事實として受け入れ、打ち仰ぐのみに候。然り感應の來たる風の如く驚くべき神祕なれども、而かも復たこれ程我等を欺かざる至誠の事實あるべしとも思はれず、而して此の事實こそは、宗教に於ける第一義諦に候也。此の事實を取除いては宗教は空虚に候。「求めよ、さらば與へられん、叩けよ、さらば啓かれん」と云ふ要求、感應、相關の真理ほど、宗教に於いて揭焉たる又大切なる真理は無之候。中心實に神を求むる心なくば、神は目睫の間を歩みたまふとも、我儕と相距る千萬里なるべく候。我等に神を愛する愛なくして、いかで神の愛の感應あるべく候はむや。愛なきものは神を識ら

ず、されば中心湧きいづる純真無雜の要求だにあらば、神は決して我等を欺き給はず、感應は電の如く風の如く、我等が知らぬ間に忽然として襲ひ來たるべく候。我れ知らず聖なる思想、崇高なる權威の現前に打たるゝの感、若しくは哀痛極まつて我れ知らず油然感謝の涙の下る折の感、若しくは洋々として一呼一吸温かなる靈光の中にある如き刹那の感は、宗教的意識の屢々經驗する所に候。ウ・オー・ツウ・イスの「夕暮」の小詩を讀み給へりや、空と一つに風ぎし夕べの海の静けさを破つて、忽然大靈永劫の響き、雷の如く詩人の心耳を覺醒せし消息は、やがて我等が宗教的意識に常に見る感應の一例には候はずや、ダマスコ途上の光耀や、ハルラ山洞中の神交も、詰まり此の例の熱烈なる者に外な

らず候。此かる感應を離れて神を見るの道は又あるまじく、來格は相感するにありとの前人の語我れを欺かず候。

所謂感應は切なる要求が結び出だしたる一念の迷にあらずやとのお疑、去りながら感應の果たして心の迷なるか否かは、意識の實證に參して所謂冷峻自知するの外は無之、所詮其の境に觸れざるもの思議の及ばぬ儀と存候。勿論悟の實悟ならず、感應の真感應ならざる例も屢々候べし、而して此れよりして一種厭ふべき宗教家氣質を生ずる慣ひに候へども、是れは唯だ眞摯なる工夫を積みて跳脱一番するの外無之候。

されば兄の所謂神の有無論問題の如きは、宗教にありては全くの閑葛藤と存候。中心真に神を感ずるものに取り

ては、神の存在問題の如きは事實上既に換釋せられたりしたるものと申すべく、之れを懸解けんげ分別ぶんべつの沙汰さたに上じて云々する如きは宗教哲學者の任なるべく候。知解ちげの了不了りょうりょうは毫も心證の事實とは關すまじく候。勿論知解の了不了といふ事に關しては、種々の意義もあるべく、隨つて知解と心證との交綏問題についても種々の解釋生ずべく候へども、是等理窟の沙汰は今は無用と差控へ候。

自力他力何れをとのお尋ね、小生は自力をも他力をも信じ候。自力ならぬ他力はあらず、他力ならぬ自力はあらず。我等の靈魂は自己の傷痕を癒やす無限の能力を有すといふ可也、而かも是れ取りも直さず神の大慈大悲力には候はずや。一塵一髮も神力の加はらぬはあらず候。小生は彼

の一切の感情を排斥して、理性の自力自悟のみを頼みや、もすれば矜きん大たい自ら高しとする一派の合理家や禪家などの宗教的意識よりも、むしろ自家の無力を感じて謙虛、神の前に「甲斐なき僕」と胸むね拊つの聲こゑに與みするものに候。

もとより、一向に六字の名號を唱へて西方淨土の空にあくがるゝ底の信仰を諷すとはあらねども、他力本願の信仰が不可拔の深根柢を人心に有するは否むべからず候。げに神に對する醇乎たる歸依きい信樂しんがくデヲてシんの姿ほど世にも美しく、氣高く、溫情の花も馨りもめてたき姿あるべしや、唯だ一筋に何思ふさまもなく、己を神に打ち任せ、依りすがりたる敬虔の眼ほど、世にも清く輝やかしき光あるべしや。小生は我が小弱を意識して、神の無限力にひしと

依りすがりたる時ほど、最も幸ひに感じたる時は無之、其は實に一種言ひ知らぬ欣悦、祝福に充たされたる感に候。然らずして自大矜高の一念萌し候時ほど、最も不幸に感じたる時は無之、其は自家中心の鋭き嘲笑の矢面に立ち候感に候。如是信頼の感と、眞の自尊とは、毫も衝突するものにはあらず候。むしろ神にあつて自ら大を感じたる時にこそ、眞個自尊の一念油然而して湧き來たるを覺え候へ。眞の自尊は「自然我」より「新人」に移りたる後にあるべく候。「自然我」の跳梁たうりやう旺んにして、自ら是とし自ら頼むの念強き時は、何となく中心木枯こかしの吹き荒ぶ空虚依るなきの感有之候に反して、自己の價值徳業を自ら是とするに強かりし希臘的意識は小生には一味の苦感に候。一切を神の力に歸して、神と

共に事を爲す時は最も生活の充實を感ずる時に候。此かる折は終日一種の優に温かなる思ひの謂はば法悦とも申すべき心の微かに繼續する時に候。此かる折は、友と語りても、書を読みても、道行く人に會うても、野邊の草花を觀ても何となく心躍るの時に候。慕はしきは法然上人や、アシ、のフランシスの萬代を薫ずる謙虛信樂の姿に候かな。

嗚呼我等に瀧ぐべき涙あらば、神に向つて瀧ぐ涙ほど貴き深奥の涙はあらず。友は我を嘲れども、我は尙ほ神に向つて涙を瀧ぐ。人生最崇高の悲哀を味うて發したるヨブの此の一語は、實に抑ふ可らざる宗教的意識の中心より迸りたる言葉には候はずや。嗚呼友よ、此の意識誰れと共にか語らん。この意識詩といはんか實なり、否詩よりも詩的

なる實也、何等の悲哀、何等の慰藉きせき、而して何等の崇高と何等の煙波えんぱとに候ぞや、此の涙を取つてわが同胞にそゝぎ、我等が事業にそゝがむは、如何に眞面目なる貴き事とは思し給はずや。

思はずも感情歎美の言葉に流れ候。次には宗教は道樂にはあらずやとの御疑念。道樂の一語は、高き卑きさまさまの意義あるべく候はむが、揣るに貴意恐らくは、宗教を道徳と較べて、其を別人不急の佛いぢり神いぢりとやうの意味にて去か宣のたまひしにて候べし。如何にも我等は人と人との關係即ち道徳をだに守らば、市民國民としての義務に缺くる所はあるまじく、随つて宗教をもて道徳の如く萬人に迫る義務を有せずと見る、是れ將た當然に候べし。但し、宗

教は道徳の必須條件には候はねども、其が圓成として、華冕として、之れに潤澤あり光輝あり究竟の歸趨ききうあらしむる點に於いては、ほゞ哲學が科學の歸趨を指し、極を立つるの趣ありとも申すべく、而して此の點が人心至切の要求の一面なると申迄も無く候。されば茲に安心の脚を托せんとする者に取りては、宗教は極めて嚴肅なる義務として、蒞たり來たるべく候。此にては、宗教は道徳よりも高き意味にての義務ぎむ至善しぜんに候。神を見てこそ人戀しさも一倍なるべく、所詮は倫理も人道も此の深根柢に立つて始めて、金剛の燄と燃え上るべく候へ。若しそれ宗教を觀美と通ぜしめて、之れを一種の道樂と見る點については、此に詮議の邊なく候。一種の宗教病云々の御言葉、是れは小生も至極同感に候。

所謂宗教病にかゝり候ものの特徴は、一切聞睹の事、皆宗教的聯想を以て迎へ、宗教的色眼鏡を通じて觀ずるとに候。彼等は所謂神の爲めに偏倚かたよるものに候。彼等月を觀て直ちに神に參し、花を眺めて直ちに如來を想ふ。美術を觀るや、彼等は美を讚へずして神聖ホリテツスを讚へ、科學に對するや、彼等は眞理を言はずして一直に“*Our science is superficial.*”などと傲語して之れを斥けんとす、彼等は一風一雨にも神の氣息を思ひ、一木一草にも如來の衣を偲ぶものに候。此くの如きは我等が宗教的意識の流れ易き自然の傾向にて、又深く咎むべきにも候まじ。唯だ弊をいへば、其の淺きにあり、狭きにあるべく候。自から信ずる所によれば、眞の宗教的意識は、美に對し眞に對する吾等が一切の自然的官能を自

由に發展せしめたる上に、又は底に活動の境あるべく候。宗教は一切物を變色し矯揉して觀ずるにあらずして、寧ろ之れを如實に觀、如實に感じて、而して其の根柢の生命の總合點を攫むにあるべく候。そは一切如實の意識を攝して、之れを其の根柢の神火もて淨うし、溢め、遍照するの意識なるべく候。

今一の吾等が戒しむべき宗教病は、自足病に候、幸福病に候。自ら得たる多少の宗教的幸福を二なき者と享受し、觀照し、把翫するに流れ易くして、進んで新經驗を拓く向上の道を杜絶する病に候。理想を申候へば、宗教は不斷に不満足の中に満足を見出だし、満足の中に不満足を見出だしつゝ、精進三昧するにあるべく、早くも小安立、小信仰の殻中に

籠居して頑冥他を異端視して相容れざる如きは、所謂宗教家の大弊と存候。現今の所謂宗教家に此の局陋の弊を跳脱し得たる英靈淡果たして幾個に候ぞや。神の見證といふにも機根無限の程度あるべく、悟道徹底といふにも極りなき内容の貧富あるべく候。我等は所謂小安心の「殼」を脱ぎすて又脱ぎすてして、不斷に新しき力を得、新しき生命に躋り、新しき經驗を鍛へ出だしつゝ、此くして寛容他と共に完き、救に入らざる可らず候。ルーテルの中候如く、信仰は實に「所有」に候、而かも「所有」は一面不斷の宗教的苦闘によりて其の領を擴うし、其の内容を深うし得べき筈に候。少くとも頓大乘門的の「一超直入、玲瓏無礙」は鈍根吾等の如きもの口に「し得べき所ならず、否達磨さへ大悟三回、小悟九回な

どいふ向上の經驗ありと古來言ひ傳へ候ならずや。されば所謂一躍も所詮は比較上の沙汰なるべく候。

貴問の通り、小生の宗教的生活は如何にも多年内鑠（ちやく）の病其の重もなる緣たるべく候。さりながら、小生は病まず健康にして宗教的經驗に富める人こそ慕はしく候へ、所詮疾病災禍は宗教的信仰の緣にこそ候へ、真原因にはあるまじく候。或は宗教を以て快樂主義、福田利益主義と見るもの、或は一時の消極的安心策と見るもの、或は政治家僧侶などの詭計に出でたりと見るもの、恐怖心の所産と見るもの、空想の沙汰と見るもの、紛然として而かも何ぞ其の中心動機たる靈覺之要求に見到する達者の察々に候ぞや。されば彼等紛々の徒が宗教の緣と因とを混じ、起源と根據とを同

視するなど亦怪しむに足らず候。所謂識者が宗教の謬見も亦久じきものに候かな。

汝の所謂神は無相の神か、有相の神か、絶対神か、差別神かとの貴問に對しては、他日の詳答に譲りて、今は唯だ簡單に二者いづれも自分の實驗の對境たる神に有之とのみ申止め候べし。一は實有一如の神にして、他は理想發展の神に候。如來若しくは天父の人格神、差別神の慈悲、光明、正義等の理想を渴仰すると共に、所謂無位の真人たる絶対神を觀じて、自家本來の面目を思ふは、我等が宗教的意識に並び行はれて相戻らざるの事實に候。苟かに信ずるに、進みたる宗教的意識は此の實相之神と、進化之神との二面の包攝にあるべく候。此くして我等が凡神教的要求と一神教的要

求と、寂靜的、美的靜觀の要求と、活動的、道德的健闘の要求と、此の一意識の中に満足の發展解釋を得べく候。而して此の意識を極と立て候へば、今の基佛兩教の(勿論大躰上)の長短歷々たるべく、隨つて我が將來の宗教の據つて立つべき新根柢もあのづから勞髡せらるべくと存候。貴意如何。

生死の超脱云々、嗚呼談豈容易に候はむや、但し一時生死問題に煩悶劇しかりし反動にや、目下は此の事に對する意識極めて鈍く、殆んど念頭に往來不致、唯だ如何にすれば今日のひと日を最も充實に送り得べきかが唯一の關心事と相成候。從來の經驗によれば、死生の一念が心頭を咬み來たるは、何處かに心の空虚ある時に候。充實の生活には、此の事決して無きやうに候。

兎にも角にも宗教的生活は小生に取りては唯一の救に候。恰も夕暮の返照によりて、農夫も、牛羊も、野も、岡も、流れも、すべて一様金色の光明に染め出ださるゝが如く、我等が無味なる日夕營々の常途の生活も、たゞゞ宗教的信仰に返照せられて限りなき意味ある莊嚴海と變じ候也。この光耀の一境なくては我等枯瘦の生活は逆も堪へ得られまじく候。是れを思ふては感謝の一念いつも油然として起こり申候。

以上順序もなく申述べ候覺束なき事ども、無論機根相應の語と御聽取下され度語の詩的となり候御咎めも候はむが、此かる事の表現に伴ふ已むを得ざる儀と御見許下され度候。所詮宗教は理にあらず、文字にあらず、唯だ經驗のみ

經驗を讀み得べく候。以上多少の文字禪が幾分にては貴兄の經驗を照らす資とも和成候はば本懐に存候。不盡

明治三十六年七月

信のこゝろを思ふ

信なき知はあらず。知の玲瓏照徹する所、必ずや信の深根移すべからざるものあつて之れに伴ふ。知るといふこと、一面よりいへば、信ずることに外ならず。知の明瑩なるほど、信も亦固帯也。若し吾人の知識作用より信を取り去らむか、所謂知識は解體して痕を止めざるべし。法則に對する信を取除いて謂ふ所の科學的知識はあらず。一知一解悉く信の宿る所、信は知の半面也。

信は知を據へ立たしむると共に、知の及ばざる境に一種特殊の光を興ふ。思ふに如何なる知識か、一指長へに神秘の天を指さる。二二ヶ四は明瑩一塵の翳を著けざる自

明の直觀知と稱せらる。而かも此の自明なる直觀知の當體を啓く秘鑰は何ぞ。自明の中に神秘あり。此には實に理解力の分析を超越せる事實あるなり。然り二二ヶ四の構成そのもの直ちに是れ大神秘力の發現也。何物の權威か、能く來たつて此の一片の自明理に籠もれる大秘力を破り得べき。そは力の發現也、生命の發現也、理知は唯だ驚歎を以て此の事實の前に立つあるのみ。更に具象の實在物を取つていはむか、一草一砂の微、尙ほ六千年の人知の入り込む能はざる不可測の深奥ある也。物、實在性を着する多き程吾人の知識は益々之れに墮く。予輩此の點に於いてはプラトーンの唯知觀を取らずして寧ろプローテノスの神秘觀を取らむかな。嗚呼何人か、知は實在を櫻むの器に

非ずと歎ぜざる、何人か神の智と識との富は深いかなと讃
 ぜざる。我儕世に在りては、實に知らむが爲めに知るにあ
 らずして信ぜむが爲めに知るの道を辿れるには、あらしか
 と念ふの情轉た切なり。されば人生に辿り深き人が、竟に
 知識生活の空虚を感じて、其の中心言ひがたき歎きと要求
 とを信仰生活の門に叩かむとするは、理りの至極にあらず
 や。知識生活の空虚に充實性を賦するものは信仰生活也。
 信の光は情の臑ろをつけたれど、其は温かなる生命の光也。
 能く全人に周流して之を煦め育む。信には知以上の慧解
 あり、證悟あり。

信は生命と生命との抱擁也。我儕真情を打ち開いて、花
 と抱き、月と抱き、人と抱くや、其處に一道生命の交流を感ず、

さればまして、生命の太源、神と相抱く我儕が信の意識に於
 いてをや。信に於いて、人は實に大生命の海に入る、其の一
 波一浪は悉く永遠より永遠に響く感謝の歌也、讚美の歌也。

信は一面、自我の大抛擲也、self-abandonment也、人の此の
 世にあるや、屢々一切の自用を棄て、知慮を絶し、理想を抛ち、
 計畫を葬り、義理人情を無みし、此くして擾々たる身邊一切
 の繋縛を拂ひ去つて、大自在觀を得むとする念、切なるにあ
 り。苟も生活の苦闘を経るもの、何人か此のにがき經驗な
 からむ。而して人一たび此の經驗の途上に立つ、これやが
 て自家身世大轉變の岐に立てりと知らずや、自家おのく
 解脱問題の前に立てりと知らずや。一步を回らせば、既に
 見る、或ものは急轉直下の自暴の坂を下り、或ものは冷かな

る因果宿命の礎の一路に入り、或ものは流蕩往いて返るを知らざる枯禪の底無沼に没し、或ものは理想の雄帆に他力の神風を孕ませて、前路耀く向上無限の海を駛る。一切を因果の必至と諦めて、寂然觀照のレジグチーシオンを言ふ寂靜觀や、高しといへども、未だ活潑々地なる生命の大機を捉らへ得たるものに非ずスピノーザの敬虔魂には流石に温かなる神祕觀の一面あり、有無俱に遣る蕩々の大悟觀はた達なりといへども、未だ人心沈痛の實要求と結び來たらず。「頼もしきは、他力大慈の風に、自力理想の船を行る信賴生活なるかな。」我儕は唯だ信に於いて、自我を抛擲して眞自我を得。信なき自我抛擲は、自暴自棄となり、枯禪空寂となる。眞個に解脱問題を解釋するものは、神に在つて世

に勝つ我儕が信のみ。

信、愛と相抱くに至つて、道德は純熟の境に入り、インワトドチッスの極に達す。正といひ善といふ、尙ほ外より迫る權威の嶮しさあれど、信といひ愛といふ、内より湧き出づる春温の生命、自づからにして、徳性の華と發くを見ずや。神恩の化育、我が裏に浴く働きて、生命こゝに湧き、悦樂こゝに生じ、愛情こゝに華さき、此くして、自他相愛の道德こゝに滋潤の雨を得、之れを信仰生活とはいふ。こゝには神の愛、我が裏に働き、我が内なる原理として活動す。カントの標榜せる理性の自律主義なるものも、信愛の眼より見れば、尙ほ他律的のみ、外鑠的のみ、其の道德は未だ醇の醇なるものにあらざる也。信愛あるものには、義務は束縛たらずして、自

發也、悅樂也。“Love betters what is best.” 信愛あるものには世間道德の事も尋常の茶飯事のみ。何んすれど復た拘々として、倫理と言ひ、道德と言はむや。

されば細心過感に流れず、流蕩枯禪に陥らずして、坦蕩々の中に、敬あり、愛あり、向上あり、歸依あるは、信の氣象也。信ある人の荷は軽く、くびき軛は易し、神と共に之れを荷ひ、神と共に之れを挽けば也。信仰の人また罪の意識に泣くことあるべし、されど其の涙や、やがて美はしき感謝讚美の涙となる。彼れは、自己の涙を拭ひ取りたまふ限りなき温情の神を父と打ち縫れば也。是故に大いなる信の意識は、玲瓏たり、如々たり、其の涙に濁りなく、其の眼に翳りなし。一切の矛盾は、其の一念の上に融會せらる。大膽と細心と、軒舉と謙遜

と、自由と依屬と、獨立と服従と、嘲世魂と敬虔魂と、白眼と熱誠と、純熟と素朴と、偉大と至微と、明識と無知と、寂靜と健闘と、抛擲と信樂と、曠達と收斂と、疎宕と密察と、剛と柔と、悲と喜と、活動と安舒と、蛇の智慧と鳩の溫和と、革命的精神と創設的精神と、戰と和と、死と生と、すべて是等諸々の矛盾を一人格、一意識の上に解釋し得て窒礙なき大自在觀を得たるもの、即ち信三昧に入れるもの也。ポロロが憂ふるに似たれども常に喜び、貧しきに似たれども多くの人を富まし、何をも有たざるに似たれど凡ての物を有てり、の語、亦實に信意識の無礙性を心證道破したるもの。此の矛盾融會の大自在を世に縦まゝにし得たる基督の信は、獨歩也、絶倫也。

（明治三十六年八月）

人格のこゝろを想ふ

人格とは何であるか。こゝには科學的、分析的に人格の意義を説明するのが本意ではない。唯だ人格に對する自分一己の形式上の理想の見解を簡短に描きたいと思ふのである。人格といへば、まづ意識の統一を意味する。何によりて統一さるゝかならば、プリンスイブル即ち主義てふ者でなければならぬ。或主義によつて自己の一切の意識内容を統一支配してゆくとは人格の第一義である。まかしながら、主義の統一といふとだけでは、人格といふ一種富贍なる意味を有する言葉を蔽ふに足らない。人格といふ言葉には一種朧ろな響りがある。單だ主義の統一といふ硬

Principale

い言葉では盡くされぬ趣きがある。少なくとも自分は、人格の語を打ち聞いて一種歎美の情を惹き起こさざるを得ぬ。人格には何とはなく餘韻がある、温かなサグゼッションがある。

Suggestion

如何なれば人格には此かる美的ともいふべき意があるかならば、其は人格の土臺となる謂ふ所の主義なるものが、趣味となつて、趣味に葆まれてゐるからである。主義と趣味、是れ實に人格を織りなす二要素である。併しこゝに謂ふ趣味は主義と離れた別なものではない、むしろ主義に對する渴愛其者があつたから純熟して一種の趣味となつたものの謂ひである。謂はば、人格の趣味は人格の主義から發射して其れを取り巻く圓光のやうなものである。主義、

人格のこゝろを想ふ

プリンスブルが此の趣味といふ圓光を發射しないうちは、未だ透き徹つた純熟の人格とは謂はれない。而して主義が未だ外鑠的、他律的で、其の人の活きたる生命とならぬ間は、謂ふ所の趣味の圓光は到底發射しないのである。主義が眞に吾人の有となつて所謂腠面盎背の潤澤となつて、始めて趣味が發し來たる。此くの如き人を稱して眞に人格ある人とはいふ。故に人格には、嚴格なる方面と、春溫の方面とがある。 主義といふ磊々たる巖に、趣味といふ優さしい苦衣（なつかしき）が生へて、嚴毅にして而かもふつくりと人を撲ち來たるもの、取りも直さず人格の氣象である。

如何なる主義が能く人格の中軸となるかといふに、其は言ふまでもなく道德的主義で無ければならぬ。されど道

德的主義あるもの、必ずしも皆人格を有するもので無い。少なくとも立派な理想的意味にての人格は、嘗だ道德的主義に支配されてゐるといふに止まらず、更に其の道德的支配が内から自發する底のもの、自家心術に體せられて渾然たる底のもの、カントの語を藉つていへば自則的（アクト・イン・シチュエーション）のものでなければならぬ。（カントの自則的倫理なるものも、吾人の理想よりいへば尙ほいまだ眞の自則的とは言はれぬ、理性の絶對命令權に束縛さるゝ道德は尙ほ到底形式的、他律的たるを免かれない。此の事は倫理上、哲學上の精論を要すれども、此には其の必要がない。）美的ともいふべき態度を以て其の道德主義に優游涵泳してゐるもの、即ち吾人の所謂一種の趣味とまでに其の道德主義が純熟してゐるもの

でなければならぬ。眞の人格を得るは決して容易の事業で無い。かの道德の權威に外から縛せられて、鞠躬如として其れに率うてゆくやうでは、未だ我が所謂人格と稱するには、足らぬ。道に遊び、道を樂しみ、道が入る息、出づる息となつて、茲に始めて眞人格を見る。

必ずしも道德上の主義に限らず、藝術上、政治上等の主義でも、苟も吾人が其れに依つて以て行動するならば、茲に能く人格を成すとは謂はれないか。然り、政治家にして、能く險夷一節、自家の政治主義と終始するの操守を有するならば、則ち政治家としての人格があり、學者にして、一念を眞理の追求に獻げて渝はるとなくば、則ち學者としての品藻、人格があると謂はねばならぬ。されど是れ畢竟政治家は其

の政治主義を道德的に運用し、學者は其の學術上の良心に忠なるの意味で、詰まる所、人格の根柢は道德主義の統一に歸著する。政治上、學術上等の主義は、其れみづからとしては、自然的で、之れを人格に結びつけ融會せしむるものは、要するに道德的運用にある。一切の主義は道德主義に統攝せられ、其の活動に編み込まれて、始めて人格と結び來たる。鍛冶家は其の鎚の一揮一下に全良心の力を置めて、始めて自家人格を鍛へ出だすのである。

藝術上の名人と稱するものには、其の技藝の精妙を極めて、技以上の道に神會したものがあつた。所謂道進乎技矣もので、彼等は技藝の三昧に達して、其處に鏗爾として或物に觸れたのである。是れ吾人が往々彼等の中に敬重すべき人

格を見る所以である。眞詩人は美假象^{メイヤクゾウ}を樂しむ以上、更に或深いものに觸れてゐる。彼等が自ら動き、他を動かす秘訣は實に此にある。人格は所謂道德家、宗教家のみの專有で無い。

吾人は學者として、若しくは藝術家として、若しくは政治家等として、皆それ／＼の本分を有してゐると共に、更に處世上種々雑多の方面に應接してゆかなければならぬ。而して此く應接する方面の多きほど、吾人の人格の社會的内容は豊富複雑になり、随つて之れを統攝する道德主義も亦博大深奥とならなければならぬ。此くして吾人の人格は發達してゆく。彼の徂徠等が一派の道學先生を罵倒したのも、畢竟、謂ふところ道學先生なるものの人格の内容、興味

の貧寒なると、之れを統一する道德主義の狹陋なるとを笑うたのである。吾人は狹陋なる形式的完人に固まらないで、他くまでも博大なる主義を打ち立てて、限りなく人生の矛盾を乗り越えてゆかねばならぬ。エマルソンの言ふ如く實に一切を意識の領内に編み入れて我が有^あとせむとするは、靈性の本性である。「耶蘇をもシェイクスピアをも靈魂の一斷片」として、我が意識に攝^{とら}めて息むとを知らざるは、我儕人性の誇りとする偉大である。我儕の靈魂は、横に有らゆる社會を包み、縦^{たて}に無窮の人道を追ひ、更に翼を翫^かつて、法界全體に擴がり、展びゆかむとする限りなき要求を有してゐる。而して此く吾人の道德主義が全法界を包容し、全法界が吾人の同情關心の境となるに至らば、是れ取りも直

さず一氣造化に迫つて天功に參するもので、道德的人格はこゝに至つて宗教的精彩を著け來たつたものである。是の一境に立つて、則ち吾人の一言一行は自覺的に全法界の進行と結び來たる。吾人の人格はこゝに最崇高の動機を得たものである。

是くの如き宗教的人格は道德的人格の内容を排するものにあらずして、寧ろ之れを攝して其の上に極致の大觀を開いたものである。こゝにて人格を統一するものは、道德主義にあらずして、信念である。信念は即ち道德主義が宇宙の根柢に穿ち入つて、天人感應の精一と煥發したものである。凡そ世に信念ほど、最も強く、深く、人格に結び、人格を動かす内在の原理はない。道德主義の統一は、尙ほ何處と

なく外鏢的で、窮屈な所がある、拘泥の跡がある。信念に動く人格は、靈動無礙の姿がある、信念ある人格には、趣味の潤澤がある、光輝がある。吾人は此くの如き人格を理想として進みたいと思ふ。

予は天地に磅礴する一大人格を信ぜざるを得ない。此の人格の感化を離れては、予の生命は寂寞として枯るゝ外は無い。天地の實在は果たして人格者なるか否かの理論問題はさし措き、又是くの如き人格者を信ずるにあらざれば、凡べて宗教的信念てふものは成り立たぬか否かをも此に問ひ明らかむる邊は無い。唯だ自分の實驗を言へば、我が全人全靈、全熱愛を捧げて、歸依三味の誠を打ち込む天地の實在者を得ずんば、どうしても満足することの出來ぬ要求

がある。この要求以上又以外の實在は、其れが真如であらうと、絶對であらうと、第一原理であらうと、其んな物は、少なくとも自分には、理觀の満足以外、鏗爾たる生命的交渉が無い。自分は所謂真如や、第一原理を冥想して、超詣一味の見識を學ぶことは出来るが、之れに向かつて涙を灑ぐことは出来ない、我が深根の道德的悲哀を打ち出だして之れに打ち克つ無限力を得ることは出来ない。自分に取つて最深の實在はどうしても愛である、感應應化極まりなきの神である。不斷に我が衷に働く神恩の自覺と、之れに伴ふ深奥なる法喜とを與へたまふ神である。而して此くの如き神を人格と謂ひ、若しくは非人格と謂ふ稱謂上の問題、畢竟何の關する所ぞ、されば假りに之れを生命といはうが、活物と

いはうが、靈といはうが、はた人格といはうが、何の差支も無い。言語の記號に執著はない。

聊かにても此くの如き實在に觸れた意識の實驗を有するものに取つては、其は極めて嚴肅なる事實である、權威である。如何なる鋭い批評の刃も、理窟の鋒も、此の一味の貴い感情的(むしろ全人的)實驗を傷けることは出来ぬのである。然らずんば、其れが如何で信念となつて吾人を動かさし得やうぞ。眞に神に動くものは人格の秘鑰を握り得たものである。

吾人は吾人の人格を脩養せむが爲めに功利的に天地の人格を備ひ來たるのではない、天地の人格に觸れざるを得ずして、其の觸發の實驗即て吾人の人格發展の不盡の淵泉

となるのである。

明治三十七年一月

道學論 節一

道德の性質は、或意味に於いて、因襲的也、束縛的也、形式的也。この意味よりすれば、孔子、ソークラテースの如き、亦鞠躬如たる一道學先生のみ。さはれ、吾人をして又道德の精神其者に對する敬虔の念を持つるとを學ばしめよ。道德の精神其者は直ちに詩と連らなり、宗教と接す。自由にあぐがれ、理想を慕ひ求むる精進の一念を外にして、また道德の精神あるべくもあらざる也。

因襲的道德とは流動息まざる道德的精神の形式化、化石化するものの謂ひにあらずや。道學先生とはこの形式化、化石化する道德の細墨にのみ依つて自他を規せんとする

ものの謂ひにあらずや。道德的天才とはこの形式的道德の底にも不斷に燃えて息まざる道德的精神の偉大に動かされて起つて新たなる理想を叫ぶと共に、又常に此の理想を眼中に置いて現行道德の意義及び價値を理解し批評するものの謂ひにあらずや。想ふ、昔し、ソークラテースが、從容として無法極まる希臘當代の國法に服從して疑はざりし所以は、畢竟彼れが斯かる無法なる法律だに、其の根柢を叩けば、普遍なる道德的精神に根據するものなることを確信したるが故なることを。道德法の精神に對して限りなき敬虔の念を有したる彼れは、不當なる國法に對してさへ、一片の敬意を抱いて逝きたる也。而してこの心、豈道德を因襲的、偶然的のものとのみ觀じ去つて、其の人心不拔の客觀

的理性の根據に看到せざりしソフィスト一輩の會し得たる所ならんや。

吾人が世の所謂道學先生の形式主義、繩墨主義を排斥する所以、是れ亦畢竟するに吾人の道德的要求にはあらざる乎。眞に道德の精神に對する理解と尊敬とを有せざるものは、道學先生の淺薄と狹陋とを批評する權利をだに有せざる也。批評家、動もすればカントの嚴肅道德を嘲笑し、批難す。されど眞にカントを難ぜんとするものは、須く先づカントと共に、我儕が道德的意識の深處に沈潜して、所謂義務之聲が如何ほどの莊嚴なる權威を以て我儕に面し來たるかを味ひ學ばざる可らず。少なくともカントが「無上大法」と叫びたる一種無類の道德的意識に參與し、同情し得る

ものにして、始めて能くカントに對して權威ある批評を物し得べし。この理解と同情となき嘲笑批難は、到底カントを傷くるに足らず、況して之れを爛らし、之れを啓くことをや。吾人は彼のシルレルの有名なる批評にさへ、やゝ輕佻なる文人一味の調子あるを惜らしとす。されば吾人はまた、彼の口を極めて仁齋一派の道學先生を罵りたる徂徠等の態度に對しても疑なきこと能はず。徂徠等は道德の精神若しくは理想に對して、果たして如何ほどの理解と尊敬とを有して仁齋等の道學を批評したる乎。徂徠は果たして仁齋を批評し嘲罵するほどの資格を有したりしや否や。道學先生に對する批評決して容易の業にあらざる也。

規々として繩墨を株守する道學者流や、數々として小理

想に固執する形式的完人は、固より吾人の一排せんとする所のもの、されど之れを一排し去つて、残るものは何ぞ。新たに藏^かち得べき新福音は何ぞ。謂ふ所の本能主義か。然らず。空蕩々觀か。非也。吾人の道德的要求は、理想を無限に本能化しゆくことにおいて、本能 *as such* を理想とすることには、あらず。吾人の要求は、又彼の心法を雙亡して人生一切の理想を迷執の塵と拂拭し去る禪家一流の空觀三昧にもあらず。理想を拂ひ拂うて、尙ほ拂ひあへぬ窮極の理想に、敬虔の涙とゞめがたきものあるは、實に人生の深きころにはあらざる乎。流れて返らざる噴達は、吾人之を取らず。

世に一派の論者又宗教家あり、動もすれば、道德の超越者

しくは「道德の彼岸」てふことを口にして、一たび宗教の靈光に照らさるゝものは、仁義道德の辯一切無用のやうに斷じ去る。道德の超越とは何ぞ、彼岸とは何ぞ。若し謂ふところ道德の超越又は彼岸の語にして、現實の差別界に於ける一切價値の抽象、拂拭、無視の義を意味すとせば、是くの如きは取りも直さず禪家一流の空蕩々の見に墮したるもののみ。吾人が歸依景仰の一念を神にさへ、げて已む能はざる所以のものは、其の能く差別界に於ける眞善美の一切價値に窮極の統一を與へて、所謂「極有るに會し、極あるに歸せしむる」が故にはあらざる乎。吾人の神は統一の神、立極の神ならざるべからず。善惡其の他の一切價値の差別を拂ひ去つて之れを空白一色の抽象に墮せしむる神は、惡魔の神

のみ、我儕が靈覺と何の交渉かあらんや。我儕が神は、一切を排したる一にあらざして、一切を攝したる一也。價値の萬色を集めたる富贍無限の一色也。是くの如き神にして始めて能く無限に我儕を超越すると共に、又能く無限に我儕に密邇す。一派論者の「超越」といひ「彼岸」といふもの、如是に觀じて、則ち不二の眞諦なり。

吾人は、彼の亂頭酒を被りて、曠達自ら道德を小とせる支那晋代の清談の一流よりも、炎々たる不斷の道德的理想に燃えて、健闘者ばらくも息まざりし古猶太の豫言者の一群を偉大とす。

(明治三十七年四月)

禪思錄

“God doth not need either man's work or his own gifts :
who best bear his mild yoke, they serve him best. His state
is kingly ; thousands at his bidding speed, and post o'er land
and ocean without rest : They also serve who only stand and
wait.” — Milton.

法喜

中宵枯坐、意識水の如く涸えて、而かもこゝろ孤ならず。
優なる喜び臙ろに我れを透る。この喜び戀ならば、あはれ、
永世而影に添ふ貴き戀にもあるかな。この戀ありて、わが

世淋しからず、友嬉しく、師懐かしく、見ぬ世の聖を偲ばるゝ。
あはれ、この喜び、私情の塵にしも染みぬる跡なく、聖光微かに
搖ぎて、我れをして澹として酔はしむ。あはれ、この喜び、
自覺の手もて掬はば消ぬべき姿して、わが枯れはてたる魂
に不盡の春をぞ吹き送る。あはれ、この喜び、現し世の言の
葉に移しがたかるべき恵みの影かな、匂ひかな。

あはれ、愛の翼われに生ひて、慈光の法の海を柔かに漕ぎ
ゆかむ彼の日の思ひや、げに今宵の思ひなるべき。あはれ、
法喜を妻とすと言ひけむ古しへ人の心を今宵の心にして、
わが懐ひての日の永はに淋しからざれ、神は我が戀也。

眞善美と神

人何ぞ眞善美を言ふに安んじて、神を言はざる。知らずや、眞善美は活ける神の抽象なり、衣なり、影なることを。まことに眞善美を慕ふものは、眞善美を通して呼吸せる神に來たる、又來たらざる可らず。理想をたゞ理想として追ふは、未だまじめに論理的に人生の高道を歩むものにあらざる也。理想の一路は髮のごとく直ちに馳せて神に到る。もし、われは眞善美の戰士なりといひて、神を否むものあらば、是れ木佛を拜して其の靈を舍つるもの也。神なき眞善美は、戀ふるに堪へざる抽象の國也。

心情の宗教

宗教は内より發する感情の聲也。外より黃卷赤軸を取

つて、押しつけに詰め込み得べきものならず。宗教は我れとわが心情の筆もて鏝り出だすべき自家觸發の文字なり、又實に然らざるべからず。日星河嶽の文章も、八萬四千の法門も、この内なる心情の要求を以て譯し出だすにあらずんば、所詮何の甲斐かあるべき、釋迦と基督と來たつて手を取るとも、能く心情要求の準備なき空白無縁の衆生を奈何せんや。有てるものは多々益々與へらる。心華開發の前には、石人語るべく、木女舞ふべし。

デロン、ステュアート、ミルやカントの宗教が一種の希望もしくは要求たるに止まりて、竟に信念とならざりし所以は、彼等がむねと神を自然外界に求めて、深奥なる自家心證の聲に聽かざりしが故にはあらざる乎。カントは「星輝の

天と「道德法」を人心敬畏の二大源頭と見たり。彼れは義務天來の權威を最も莊嚴に獅子吼したる哲人也。さはれ彼れの所謂神は、是くの如き義務の與法者として、若しくは道德成立の一要件としての存在以外に、如何程の意義を可有する。所詮カントの神は、道德といふ建築の爲めに組み出だしたる一個の足場の如きもののみ。外より備ひ來たれる *deus ex machina* のみ。如是機械的木偶神、畢竟何爲者ぞ。近時所謂倫理的宗教を唱ふるもの神亦要するにこの絶對を以てざるなり。如是の神我が靈覺の要求と何の交渉かある。ミルやカントや、尋常腐儒を抜く千仞の器を以てして、尙ほ其の學究的精神に謬らるゝ是くの如きものあり。彼等は竟に深奥なる宗教的感情を解し得ざりしもの也。眞に宗教の秘鑰を握らんとするものは、其の心情を赤子の如く打開いて

自家靈覺の聲に聽かざるべからず。宗教的天才の神を見るや、其の已みがたき直接なる心情に於いてす。彼等は端的に神と相抱く也。

カント若しくはミルを去つて、ルソーに來たらば、吾人はこゝに一個醇乎たる宗教的天才を見る。ルソーは歐洲第十八世紀當代の偏知的大潮流の中を孤行して、中心無限の寂寞を感じぬ。彼れは滔々たる當代の「時計師哲學者」の中を、獨り無人の野を行く思ひして、溢るゝばかりの自家心情の要求に沈潜し、而してそこに直ちに神の聲を聽きたり。彼れは從來の學者等の如く萬有に現はれたる神智の意匠と調諧とを理由として神を見たるにあらずして、むしろ壓しがたき自家心情の要求のうへに神を見、さて翻つて萬有

に於ける神の顯現を見たるなり。彼れは萬有の善美より推して神を見得たるにあらずして、寧ろ神を信じたるが故に萬有の善美を信ぜんとしたり。アルテールの信仰の躓きの石たりしリスボンの大海嘯が、彼れの信念に一翳を投げ得ざりし所以、實にこゝにあり、眞に神を見るの眼は、ルンに依りて啓かれたり。

「汝の心をして常に神の存在を願ふやうなる状態にあらしめよ、然らば汝は決して神の存在を疑ふことなかるべし」とは是れルソーが『懺悔録』中の名語にあらずや。彼が神の存在の唯一證據は、自家直接の感情の要求を外にしてはあらず。一世の科學、哲學が、擧つて神を無みすとも、彼れは尙ほその自家心情の聲を否む能はざるなり。「友は我れを嘲

れども我れは尙ほ神に向つて涙を灑ぐ」。彼れは神なき生活に得堪へざる也、彼れは永く疑惑の中に依々する能はざる也、神なき人生は彼れに取つては考ふべからざる矛盾なりし也。かくして彼れは其の至心情の宮居に神を齋き護りぬ。何等心情の權威ぞ。

されば又ルソーの祈りを聴け。彼れの祈りは感情の迸出也、熱情の奔騰也、混沌たる不整語也。神に對ひて、潮なす彼れの感情は、常に其の言葉を後へに踏跟せき。彼れの祈りは無言の祈り也。かの巧妙なる祈禱者に見るが如き一語紊れざる美辭的祈禱は、彼れの爲し得ざりし所。彼れの祈るや、唯々歎美也、神往也、言ひがたき歎き也。何等の觀念、何等の言葉、何等の記號を以てするも、到底彼れが神

の一念に簇り起る富贍深奥なる感情を表出するには足らざりし也。彼れは實にこの實驗を根據として、理性に對して感情の獨立の權威を宣したる也。(而してこれやがて後の歐洲の思想界にセンチメンタリズム、ロマンチズムの大潮流を捲き起こしし一源頭にはあらざる乎) 彼れ曾て祈禱について曰へらく、「神の御業みわざの冥想が、我儕に起こさしむる沈黙なる歎美ばかり、彼れに對する價值ある崇敬はあらじとこそ思へ。而してそは何等の所業も得て表はしがたきものにぞある。我れ我が室にて祈ることいよいよ稀に、且つ冷かになりぬ。されど美しくしき山水の眺めは我が心を跳らしむ、我れ其の何故なるかを語る能はざる也。我れ曾て一監牧師の傳を讀む。彼れ或老婆の唯だ「ア、と

いふ一歎辭の外に何等の祈りの言葉をだに有たざるに避ひ近おひける折つ詮つげていふ、お婆さん、いつもそのやうにお祈りなさい、あなたの祈りは我このよりも貴いと。我が祈り亦この類也」と。

嗚呼我がルソーについて此く語れるを異ちがしとする勿れ。予は我がルソーの宗教的意識の一面に、心跳しんてう禁じ得ざる或者を有する也。ルソーの神は我が神也。

要求はやがて感應也。要求其者實に神の愛より來たる。全世界は我れ假かし之れを虛無と觀じ得とせんも、我が胸臆の底なる叫びと、この叫びを通して顯現する神とは竟に之れを空じ得べからざる也。

大いなるかな言や

「父よ、若しみこゝろにかなはばこの杯を我れより離ちたまへ、されど我が意のまゝをなすにあらず、唯だみこゝろのまゝになしたまへ。」大いなるかな言や。何等の抛擲、何等の歸依、何等の從順、何等の信樂、何等の安住、何等の法音。こゝに基督教在り。否、一切宗教の秘訣在り、眞諦在り。こゝに人生の最大煩悶と人性の「可能」の超自然的實現と在り。こゝに神人最崇高の和解在り。こゝに最も深刻なる戦ひと最も光榮なる勝利と在り。こゝに世界勢力發展史の縮寫在り。こゝに大自力と大他力との融合在り。こゝに最も深き意味にての贖罪の福音在り。

新人と大自在

吾人の此の世にあるや、屢々道德や、習慣や、法律や、人情や、其の他あらゆる身邊の檢繩を脱し去つて、直ちに空曠冲漠の大野を獨往せんとするの念禁じがたきことあり。老佛と共に彼の世間踏常の徒を笑倒し去る一個超空の大自在觀を得んとするの心とゞめがたき事あり。且らく其の何故なるかの理山を問ふを休めよ、是れ實に拂ひ去る能はざる吾人の欲念にはあらざる乎。されどこれと同時に、吾人の心には尙ほ他の一つの則あるを見る。即ち吾人の願ふ大自在は、神に在りての大自在ならんこと也、神に蘇りて得來たる新人の大自在ならんこと也。かの心法雙つなが

ら空じ去つて寂滅性中随つて飲啄する底の没一切理想の
 大自在は、是れ餘りに天地人生の歸趨を無みしたるもの
 はあらざる乎、往いて反らざる空蕩の大自在は吾人の取ら
 ざる所也。

げにや吾人が抹すべからざる宗教的要求は、我の大抛擲
 也、我を全く神に没入すること也。無我、安息、出離、救濟、寂滅、
 解脱の消息即ち是れ。されど是くの如きは吾人が宗教的
 要求に於ける消極の側なるべきのみ。吾人は一切を神
 に擲つて神に死するの安息を願ふと共に、又一切を神より
 得て神に甦るの積極的活動を願ふ。此くの如くして得來
 たる新たなる理想の装ひに、健闘、向上、精進、征服の首途かどてに上
 らんことは吾人中心の欲求にあらざる乎。
基佛二教はこの宗教の消極的使

命の一面に於いては互ひに手を握りて進み得れども、その
 我を没して後再び新人と甦る趣に著るべき教相の差別あり。動もすれ
 ば人間を本位と立てて、狭陋なる立極觀テオロギカル、セウに住せんとする基
 督教は、須らく禪家超詣の見識に學ぶ所なかるべからず。し
 スピノーザが、人間一切の意欲、理想に無頓著なる永劫自然
 の大法を説いて、一種寂滅的なる絶対服従觀を立したるは、
 是れ即ち彼れが事ごとくに人間本位主義より割り出ださん
 とせる歐洲第十七世紀當代の淺薄なる立極的基督教に慊
 らずして、一往超空なる禪的宗教觀を掲げたる大見識也。
 スピノーザの曠達と敬虔とは、實に千載の矜式キョウシキたり。され
 ど吾人が竟にスピノーザ若しくは禪家に之かざる所以は、
 其の餘りに人生の歸趨若しくは理想を抛ち過ぎたるにあ
 り。スピノーザの神は、吾人が一切の理想を泡沫と消えし

むる無邊の大海也。げにや、其は實在の大いなる海也、而してそは又大いなる寂びしき海也。吾人はこの實在の大海を望んで戰慄す。(この寂びしき實在の海をしも満心の愛もて抱きたる彼れが神祕的熱情は今言はずしもあれ。)

あはれ理想を抛ち抛つて、尙ほ竟に抛ち去る能はざる理想はあらざる乎。而してこの一個の理想を限りなく實にしゆく新人の向上を外にして、謂ふところの大自然はなきにあらざる乎、一切を無記無相と觀じ去つて、この抹殺すべからざる中心の理想をも、尙ほ心上一塵の迷執として拂拭し去らんとする空蕩々の見は、竟に我儕が安宅ならず。人生を流注する大歸趨に漚ぐ敬虔一味の涙には、實に虚無寂滅主義の理解する能はざる深きこゝろあり。吾人は一切

を抛擲し去つて、尙ほ浩然として満心に主張すべきものを此に見る。されば我が所謂神は、一切の有を攝して立つ有極の神にして、一切の有を排する無極の神にあらず。我が所謂神は有^ウ之^ノ有^ウにして、無^ム之^ノ有^ウにあらず。我れはこの意味に於いて、寧ろスピノーザの神を去つてプラトーンの神にかんかな。基督曰く、我が父は今に至るまで働きたまふ、我れも亦働く也」と。

功利と宗教

宗教は必要也、信仰は必要也、安立は必要也といひて、未だ必要以上の宗教的自覺を有せざる時代と國民とは禍なるかな。靈海の渡船師として佛陀を必要視するもの、倫理修

養の具としてゴッドを必要視するもの、此くの如き徒は未だ共に活潑なる宗教的感應のこゝろを語るに足らざる也。宗教は功利にあらず、否、功利以上也。實用功利以上、堂々として響き來たる自家靈性の要求に觸れずんば、吾人の宗教や畢竟虚飾の根無し草のみ、風の前なる糞糠のみ。

(明治三十七年四月)

方丈録

悟道の意義

中江藤樹曰はく、明覺大悟の人は現世の事は申すに及ばず、生前死後のことわり、天地の外の道理まで、白晝に黑白をわかつ如く明らかに知り給ふと。果たして然る乎。大悟の人、尙ほ望んで見ず、求めて得ざるものはあらざる乎。大悟の人は、明鏡止水の如く、湛然萬類を鑑して一塵のその心を翳するものなき乎。智に於いて燭らさざる所なきのみならず、情に於いても亦能く一芥滯なきを得る乎。嗚呼、これ未だ眞に宗教的生活を語りて精しからざるもの也。哲

人に蹉躓の涙あり、明覺の人尙ほ中心言ひがたき嘆きあるべし。宗教的生活の一路に分け入るもの、迥り深ければ深きほど、神祕なる生命の掬むに盡させぬ深憂あり。さやか
に神の聲を聴きたるもの、尙ほ時としてその聲に聴き惑ふことあり。面のあたり神の面影を見たるもの、尙ほひねもす神を尋ねて會はざる悲しみあり。如^{かくのこころ}是は實に有限を宿とせる我儕人間の、所詮免れがたき約束也。誰れかいふ大悟徹底と。大悟といひ徹底といふも、到底絶對なる大明の境にあらず。そこに一味の朧ろあり、求めあり、盡くしがたき衝動あり、悲哀あり。思ふに宗教的經驗の内容を如實に看取するものは、この一個の事實を許すに吝ならじ。

天地人生は到底全く悟りきらるゝ者にあらず、又をを全

く悟りきることにのみ意味ありといふべからず。むしろ悟りゆく我儕が無窮の活動そのものに深き意味ありと知らずや。我儕が理想は、人生一切の矛盾と悲哀とを超越しつくしたる玲瓏たる明悟大覺の境にのみあらずして、又實に個の限りなき矛盾と悲哀とを限りなく超越しゆく波瀾萬疊の行路そのものにある也。我儕の子は、悟りつゝ、戦はざるべからず、悟りつゝ、求めざるべからず、悟りつゝ、戀ひせざるべからず、悟りつゝ、涙なかるべからず、悟りつゝ、迷ひ學び、思ひ、修め、働かざるべからず。迷ひなく、求めなく、戀ひなく、戦ひなく、修養なく、活動なき悟とは何ぞ。戦ひと勝利と、是れ人生の、又悟の、最も貴き意味ある内容をなすものにあらずや。謂ふところ禪家の悟も、一面猛烈なる向上の功

夫を離れてはあらずとぞ聞く。かの無窮向上の功夫なく、冷然として悟りすます悟は、死悟のみ、抽象悟のみ、野狐禪の悟のみ、心ある落花の風に面上を拂はれて、尙ほ黙々語なき石頭佛の悟のみ。玲瓏削成の基督の意識にさへ、尙ほ或悲哀煩悶の影の、その最後の生涯にまで認め得らるゝにあらずや。

人生の色調は薄明也。たゞに美の薄明なるのみならず、真理も亦薄明也。而して宗教上の真理を殊に然りとす。直観知の一躍に依りて神を攫むといふか、意識ありて知識なき恍惚の境に神に接すといふか、至純の心情を通じて直ちに神の聲を聴くといふか、誰れかこれ等の宗教的真理を否まむ。されど確實なる意識の證悟を経て、眞に是くの如

き宗教上の真理を攫み得たるものとても、尙ほポーロと共にわれら今鏡をもて見るごとく見るところ臙ろ也との嘆なきを得べしや。神は神祕也、人生は薄明也、悟は臙ろ也。而してこれ何ぞ傷まむ。一たび神に觸れたる心證の内容は、我儕が不盡の法悦及び活動の源として枯るゝとあるまじければ也。願はくは我儕悟れりといふと勿らむ。願はくは我儕悟らずといひて我が中心の證悟を否むと勿らむ。悟の中に迷を觀じ、迷の中に悟を觀じ、かくして我儕が宗教的生活は無窮向上の意味を糾ひゆくと知らずや。

安心立命と永生

一たび天地の父母の温かなる懷ろに身を委ねたるもの、

如何なれば尙ほ遠々然として死を恐るゝ乎。出でて野に咲く花を見ずや、明日爐に投げ入れらるゝ名なし小草だに、惑はず疑はずおのがじゝの手振美しくしうけふの一日を咲き誇れるにあらざや。何ぞその運命のつたなくして而かもこの刻薄なる運命の下に満心の誠を咲き出でたる彼等が生活の優にして氣高き、彼等は不朽を時に得ずして、その性を盡くす充實の生活に得たるなり。彼等は手弱けれども強く、果敢なけれども朽ちず、やさしくしけれども死を嘲りぬ。盡性、これ神に連なる唯一の生活にあらずや。されば支那の古聖人はいひき、胡たに道を聴けば夕べに死すとも可也と。希臘の古哲人はいひき、一知見の發揮せらるゝところ、眞幸福そこに存して、復た時を累ぬるを要せずと。

更にコンコオドの哲人は教へて曰はく、*"in the flowing of love, in the adoration of humility, there is no question of continuance."*と。是くの如きは、則ち時そのものを超越して眞生命に入ることを得る自覺を據べたる東西同調の語にあらずや。花も人も唯だくゝその性を盡くし科を充たすことを外に、して不朽に入る道はあらず。花は自覺せずしてこゝに安立し、人は自覺してこゝに安立す。人この自覺ありて如何なれば尙ほ死を恐るゝ乎。

死は實に人生最難透の問題也。而して信愛の生活は、ひとり其の解釋の秘鑰を與ふるものにはあらざる乎。神を信じ人を愛する充實生活に安立するもの、いづこに死の影を見る乎。信愛の生活には恐れなし、空虚なし、死なし。一

氣無間斷にこの充實生活に我を没するものは、是れ無慈悲なる「時」の破壊力を一蹴して「時」以上の不朽に入れるもの也。人この自覺ありて如何なれば尙ほ死を恐るゝ乎。

死を恐るゝは意識の消滅を恐るゝが故といふ乎。意識の有無は、必ずしも眞生命の有無と關はず、理想の成就、これ我が戀、我が生命にあらずや。理想の實現に生きんとするもの、尙ほ何故に意識の斷絶を恐るゝ乎。理想の實現に眞生命を攫まんとして、寧ろ喜んで意識の斷絶を迎へたるためし、古來多きにあらずや。されど我儕は尙ほ意識なき精神なき眞生命の意義價値を疑ふといふ乎。げにこの疑ひは、抑へんとして抑ふる能はざる人心の深き要求に根ざせり。何人か意識又は精神と伴はざる眞生命てふ意味少

なき美はしき言葉に欺かれて満足するものぞ。何人か冷かなるエテルギーの實在の海に、わが眞生命の故里を見出だして中心に安んずるものぞ。吾人の理性は客觀的に個人意識の消滅を是認すると共に、一面尙ほ何等かの形にて我れ以上の大いなる意識精神に連なるを得べしてふ猛烈なる主觀的情意の要求を左右すること能はず。この事實としての要求は、果たして客觀的眞理なる乎、或は根據なき一片の主觀的空想に過ぎざる乎、若し客觀的眞理なりとせば、そは如何ほどの範圍に於いてなる乎。この理性と心情との慘ましき矛盾の解釋、これ即ち個人及び國民の宗教生活史上の一大難問也。今は如何にこの一關に處すべきかを言はず、唯だ或方法によりてこの一關を經過したるもの

としてその一種の解釋の結案を掲ぐるに止むべし。曰はく、我儕個人意識の底には、我儕個人意識の根ざして華さける、大いなる普遍意識の流れ、永劫の威嚴を以て常に目ざめて實在すと。予は今哲學上、知識學上の或系統に參し、若しくは哲學上、知識學上の一解釋として、このむしろ陳腐なる一立言を提出したるにあらず。唯だ若しこの一信念なくんば、而してこの信念は、たゞに吾人の道德上の要求たるに止まらず、又實に吾人心情の中心に響く直接の證悟に含まらるゝもの、この直接の證悟即ち吾人の宗教的實驗の最も深き内容の一部をなすもの也、文明といひ、歴史といひ、人道の理想といふ大努力も、その永劫性の根據を失ひて、竟に時間の逝波に織り出ださるゝ美しくしき虹霓の夢たらざるを得

る乎。神は意識を越し、精神を越するものなるべし。されど超するは空ずるの意にあらず。少くとも神には、意識的精神的の方面ありて、ふこの一信念なくんば、我儕が文明的努力に含まるゝ一切の理想の實現成就といふもの、要するに刻々空之空に歸せざるを得る乎。我儕人類は、刻々空之空を搏ちつゝと知りながら、尙ほ何が故に大いなる文明の夢を營まざるべからざる乎。吾人は厭世論者の一派と共に、人生の行旅を以て或究竟の目的地に達する手段以外に、意義なしと見るものにあらずして、寧ろ人生の歩々の行旅そのものに絶對の價值を置かんとするものなれど、この人生の行旅にして、若し普遍永劫の意識的評價の對境となるより生ずる或一種の永劫的意義を著し來たらずば、謂ふ

之ろ人生の絶対の價值なるものに大疑なき能はざる也。
 永劫の意識的、精神的評價なきところ、人生永劫の意義ある
 べくもあらず。そは空也、夢也。されど我儕は尙ほ人生の
 夢を實と思はしむる吾人の自然性に導かれて人生の戦ひ
 を戦ふべしと言はん乎。理性を有するもの、誰れかまじめ
 にこの巧妙なる自然性の幻術に迷はざるものあらんや。
 思うてこゝに到れば、厭世論者ならぬものも、能く "the infa-
 rite vanity of the whole" の大絶望に驅られざるを得る乎。さ
 はれ聴け、神人基督の權威ある語を、曰はく、天地は失せむ、さ
 れど我が言は廢らじと、何が故ぞ。真理は神と共に、神の永
 劫の意識的評價と共に、永劫に在れば也。人は逝き、天地は
 失せ、時劫の波亦影の如く駛せ去らむ、されど大いなる普

遍意識、普遍精神は、尙ほ儼として存すべく、而してこの大意
 識の評價の中にこそ我儕が文明發展の歴史は永へに光輝
 を放たむ。神の意識的評價の失せざる限り、眞善美は終に
 朽ちじ。一種貧寒なる抽象的エテルギイ的生命以上の永
 劫の意識的、精神的評價もしくは觀照なき文明といひ、眞善
 美といふものの價值、畢竟幾何ぞ。されば人知らぬ谷間の
 白百合花は、神の意識に永劫の馨りを放つならずや。

されば、我儕が個人意識の消滅必ずしも恐れ悲しむを須
 るず、唯だ我儕に迫り來たる最も嚴肅なる問題は、我儕は如
 何にして神の大意識、大精神に連なるを得る乎といふとな
 り。而してこゝに吾人の解答は、おのづから前に復り來た
 る。曰く、盡性、是れのみ、信愛之、生活、是れのみと。如是充實

の生活、是れ我儕が神の大意識に連なる唯一の方法ならずや。理想を充實するものはそれだけ神の生活に分け入れる者也。かくて我儕の個人意識は、死と共に星の如く消えて、日の如く神の大意識に生まれ出でなむ。ポーロこの心を言ひ表はして曰はく、我儕今見るところ朧也、されどかの時には面を對はせて相見む、我今知ること全からず、かの時には我が知らるゝ如く、我れ知らむと。

時間的永劫は偽永劫也、惡永劫也、眞の永生は徒に時間を累ねて得らるべきものにあらざる也。

充實生活と同情

我が性を盡くし、我が理想を充實せしむるには、おのづから限りあり。殊に世には、病苦その他不幸なる事情の下に、己が天分の萬一をだに發揮する能はざるもの多かり。人この境に立つて、能く躁進、競争、欲羨、嫉妬、猜忌、不平、自暴等の諸念に襲はれざるを得べしや。而してこれら諸煩惱の片影だに萌しそめんか、我儕は中心立ころに空虚の蛇に咬まれて、氣餒え志枯れむ。前に志望發展の途を塞がれ、後ろに無明煩惱の蛇に追はる。この危機より我儕を濟はむものは何ぞ。曰はく、唯だ一、他の事業の成功に満心の同情を寓する、是れのみ。たとひ日蔭の萎れ花となりて一生を蓬蒿に埋むらむとも、我れは尙ほ豊かなる天日の恵みに花咲き匂ふ他の成功の事業に同情して、こゝに我が理想の成就を見ることを得るなり。此れに誦して彼れに信ぶ、我儕は

尙ほ此に我が性の發揮實現を見るとを得ざる乎。人生こゝに涙なきにあらざるべし。さはれ、そは克己、デヂーシ^ロンの美しくしき氣高き涙也。この献身の涙ぞ、ひとり主觀の攀籠に局躋する我を解脱救濟する恩寵の力なる。我儕もし萬法の善を我が善として其の發展を樂しむ公明濶大の境に安住することを得むか、氣餒えず、志枯れず、一心浩然天地の化と流行して不息なるべし。之れを眞の自我實現とはいふ也。一念ひとへに我を中心として廻轉し、我が事業の發展成功にのみ全興味を集むるもの、誰れかは缺然として中心の空虚寂寥を感ぜざる。げにや我儕が心の火は、不斷に靈魂の窓を開いて大世界の火と接^{ヒキ}らずば、凝塞填咽して、堅實ならず、恒久ならず。他の成功を我が成功として、社

會的、國家的、人道的發展の中に私の發展を見るものぞ、ひとり盡きざる永劫の燄を著ふるとを得べき。

(明治三十七年六月)

黙想記

理想信念の自家實現

理想信念のある所、一切の物その味方となり、臣僕となり、其の實現發展の一形式、一器具となる。理想信念のある所、神の鞭は慈恩の鞭となり、その鞭は溫和なる鞭となる。人生の最慘事と稱せらるゝ戦争だに、理想信念の宿る所、一種崇高なる光彩を著け來る。理想信念を以て戰ふ、こゝに於いてか猛き武士の心にも慘として驕らざる敬虔の念あり、鋭き劔戟の影にも優に仁けある温情あり。瀧は巖の中に自家の意志を實現す。理想信念は實に戦争てふ恐るべき

出來事の中にさへ、自家の偉大を實現發展せずんば已まざる也、戰若し實に已むべからざるものならば、戰をして權威あらしめよ。何をか戰をして權威あらしむる。曰はく理想のみ、信念のみ。大いなる理想信念のある所、戦争そのものが一個の詩的、宗教的、人道的感情の發現形式となるにあらずや。何物か頑然として其の大同化力、大實現力に抗衡し得べき。見よ死も亦その敵にあらず。近く日露の戰に於ける我が金州丸の將士の花の如き最期振りは、是れ彼等が少なくとも自己の職分に對し、君家國家に對する理想信念の熱き感情に燃えたるが故にあらずや。理想信念は慘憺たる死をも優に美しくしう同化してその實現の具たらしむ。何物かよく其の烈々たる發展力の矢面に立ち得べき。

神は曾て單調無意義なる亞刺比亞の曠野にマホメットの魂を蒔きぬ。而して見よ、この寂寞たる自然兒に宿れる芥種かしなねほどの理想と信念とは、沈々として聲なく、飽くまで曠野の砂と雲と星とを攝取同化して、竟に世界の精神界に於ける參天の一巨木と發展せしにあらざや。神は又曾て古の猶太國民を最も殘酷なる流離、放竄、饑餓、疾疫、俘虜、奴隸、亡國等のあらゆる状態の中に置きぬ、されど猶太國民独自の理想と信念とは、巖間に肥ゆる水の如く、これら一切の艱關の事情の下に、いやますく、に清冽の光を増し、奔放の勢を盪して、發展の極する所つひに耶蘇基督の人格と事業とを現出せしにあらざや。世界に一の言葉あり、道あり、理想信念の種子あり、其の驚くべき大實現力は、この偶然無意義な

る原子相尅の大塊に智慧を附し、秩序を與へ、目的を布いて森然たる自然萬有こゝに成りぬ。理想信念の自熱する所、物質も原子も、自然上の害も、道德上の惡も、自然も、人も、否神そのものも、その撓揉如意なる形造力に従はずといふことなし。人は因果宿命をつれなしといふ、されど大いなる理想信念の前には、因果宿命も寧ろ圓滿なる神的秩序として歎美崇敬せらるゝならずや。風吹き浪卷く何の意義かある。されど尙ほ詩人の高く歌ふを聴け、

“Winds blow and waters roll,

Strength to the brave, and power and diety,

Yet in themselves are nothing.”

理想信念のある所、無心の風浪も亦その味方となり、力と

なり、戀となる。仁者にして山に寄託の悦よろこびを深うし、智者にして水に觀省の味を永うす。されば諺に、枯木も三年拜めば花咲くといへり。枯木おのづから花さくにあらず、信ずるものの信力之れに入りて妙法の花を咲かしむる也。誰れか之れを主觀の迷ひといふ。げにや我等が歴史といひ文明といふもの、亦是れ我等が理想信念の客觀の形を取りて摩訶妙法の花と咲きたるものにあらずや、文明史の營みは、人類がその理想信念を客觀界に實現しゆくゆめまほうし夢幻ならぬ大いなる實在也。何物か其の超絶的大發展力を遮蔽し得べき。一切の物皆矛を逆まにし來たつて、其の發展圈内の一形式一要素とならずんば已まざる也。科學といひ哲學といふ、是れ亦我等が理想信念をもて曾て無意義沒交渉な

りし自然と人生とを翻譯征服せる實現の史を語るものに外ならず。理想と信念との觸るゝ所、何物をも其の代言者スピークスマンたらしめずば已まず。この人道の精神に宿り、個人の精神に宿れる理想信念の無窮の發展向上を冥想するもの、誰れか崇高浩大の感に打たれて驚歎、敬畏、發憤、興起せざるべき。世の悲哀に泣き、逆境になやめるものよ。理想信念だにあらば、悲哀逆境はわが味方也、友也、恩寵也。所詮神の筈しよとは堪へがたき無慈悲のものにあらず、そこに深き智慧あり、仁愛あり。一切の不幸害惡は理想信念に打ち勝たれんが爲めに在り、病苦尙ほ我儕が謙遜、虚心、忍耐、從順、平和、歸依、忠恕、克己、献身、剛毅を學ぶ無上の學校には、あらざる乎。涙なき世は淋しからまし。理想信念あるものは、苦くるしみき涙を祝福の

涙とす。嗚呼誰れか眞に能く上天の攝理のこゝろを啓くものぞ、大いなる理想信念の鍵を有てるものぞ其の人なる。何れの時か大いなる理想信念の要なからん、而して今の時は更に痛切に我儕が個人として國民として雄大深奥なる理想信念を要する時にはあらざる乎。

職分に對する自覺

職分に對する世の多くの人の覺悟態度に二様の誤謬あるを見る。一は自己の職分を以て或他の目的の手段以外に何等の意義價值なしとするもの、是れ職分を功利的、機械的、エクスターナル外在的に見るもの、他の一は自己の職分を其者みづからインtrinsicに自立的に價值ありとはすれど、そが人生全體の關係に於

いて、如何なる位置を占むべき者なるかを自覺せざるもの、是れ職分を孤立的、超然的、非社會的に見るもの、前者は世間踏常の徒に多く見るべく、後者は謂はゆる專攻學究の徒に多く見るべし。職分を機械的、外在的に見る、是に於いてか職分と自己の人格とを結び得ずして、職分の中に自己を發見し、本性を充たす能はざる也。職分を孤立的、超然的に見る、こゝに於いてか自己の職分の社會的、有極的意義テレオロジを看取し得ずして、窮年迄々、無邊の大實在の一小點上に、實驗室に、機械室に、書籍館に、工場に、人生全體と風馬牛なる五十年の生涯を送了す。(吾人は眞個の學究を敬す、自己の專攻職分の社會的、人生的意義を自覺せる學究を限りなく敬す。)前者に職分神聖の念より發する獨立自尊の自

覺なく、後者に人道に參し天功を亮くる崇高なる自覺なし。職分神聖の一念は、吾人をして抱關擊柝の職にも滿心我が性を盡くさしめずんば已まず。此に王侯宰相と併び立つて愧ぢざる限りなき尊嚴あり。主觀的に我が性を盡くすといふ上よりいへば、一切の職分は平等也、同價也。我が性を盡くすの至ると至らざると、唯だこの一事を外にして、神の前に評價の標準あらず。性を盡くすの至らざる王侯は、性を盡くすの至れる一匹夫よりも神の前に卑しとせらる。これを職分に對する主觀的評價といふ。更に若し職分を社會人道の究竟目的に參して其れに及ぼす効果上より評價せんか、こゝにはおのづから一個の異標準を生じ來たる。こゝには人生の究竟目的に貢獻すること多き職分

ほど、高しとせられ、貴しとせらる。職分に階級あり、差別ある也。この意味よりして、吾人は力士よりも政治家を高くとし、車夫、馬丁よりも學者、美術家を貴しとす。後者が人生の目的系統に占むる位置は、前者よりも一段中樞的なれば也、重要なれば也。之れを職分に對する客觀的評價といふ。吾人若し職分に於いて性を盡くすことを得ば、車夫、馬丁たると學者、政治家たるとを問はず、主觀的偉大を得べく、若し職分に於いて人道の究竟目的に貢獻することを得ば、貢獻の比較的に多きを得ば、客觀的偉大を得べし。卑き職分をも重んじて高き地位にも足れりとする事勿れとは、この也。

吾人は至誠と共に大志、大望をも貴ぶ。主觀的偉大と共に

に客觀的偉大をも重んず。誠あつて事功の見るべきなき主觀的偉大、消極的君子は、未だ完璧の理想とするに足らざる也。されど思ふ、何人かよく客觀的偉大即ち事功を以て神の前に偉とせらるゝものぞ。非凡の天分と精力とを併せ有して、百歳の壽を保つ者といふとも、其の一生の事業を神の永劫の事業に較す、眞に蒼海の一粟のみ。言ふに足らず、誇るに足らず。然らば則ち吾人は如何にして客觀的偉大を得べき。他なし、他の事業を我が事業とし、他の偉大を我が偉大とすなる大同情に住する、是れのみ。我が性を盡くし、天分を完うし、更に天地永劫の事業に没我同情して、これに滄ふべからざる悠々たる樂地を占むるもの、君子なる哉、大人なる哉。

見神の眼

吾人は權威ある良心の聲よりも、又明瞭なる哲學上の知識よりも、むしろ一種臃ろにして熱烈なる思慕の情そのものに於いて、一きは強く、著るく、至高者に觸るゝ思ひあること屢々也。若し至高者を見る一種特別なる眼もしくは感官てふ如きもの吾人人間にありとせば、取りも直さずこの思慕の衝動にはあらざる乎。思慕の衝動は、おぼろげなれども中心湧き出づる不可抗の力あり。眞實に思慕するもののみ、思慕の超自然的、超人間的權威を知るべし。思慕その者が吾人の理性をもて、左右し難き實在の深處に根ざせれば也。一切純眞なる奮勵は上天より來たりて、上天に嚮

ふ。吾人が理性の燭を點じて正面より自覺的に、至高者を尋ねる時は、彼れはまば／＼吾人を回避す。恰も霧裡の幻影の追へば、追ふほど遠ざかりゆくが如し。而して吾人の知らず思はざるの時、空心我れを忘るゝの時、彼れは窃かに吾人中心の抑遏しがたき思慕の情を前驅として現はれたまふ。唯だ知る、この刹那、我が思慕の情は、やがて温き彼れが慈恩の心なることを、唯だ聞く、この刹那、我が思慕の聲は、やがて彼れが感應の聲なることを、この高潮の一境を自在にしたる古への神人が、常に天地の父の聲を聽きたりし、さもありぬべきこと也。凡夫もやがて佛也。熱烈已みがたき中心の思慕に驅らるゝもの、何人かこの高潮の一境に參することなかるべき。何人かこゝに生死一如の永生に入

るとなかるべき。自然の因果律は、この一種の超自然的飛躍を不可思議とすべし。されど此の不可思議こそ、宗教的意識に於ける最も確實なる、最も中心的なる實驗にあらずや。この世の智者學者の唾して棄つる蹟きの石も、神の國にては真理の隅の首石となる。この一種の相即、感應の實驗こそ、宗教の第一真理にあらずして何ぞや。されば我儕が思慕の情をはかなしといふと勿れ。「神を思ふものは神に之く」。熱烈なる思慕、是れ我儕が天地の至高者と面する莊嚴なる殿堂にはあらざる乎。神無きを愛ふるものは、先づ神に對する熱烈なる思慕の情なきを愛へざるべからず。我れに熱烈なる思慕の情なくして神を見んとするは、眼なくして光を仰ぐもの也。哀しからずや。所詮神を見るは

感ずる也、アーネンする也、實參實證する也、觸發する也。冷頭なる實驗哲學者スペンサーに、其の所謂「不可知者」に觸れたる意識を表はして唯だ感ずといへり。

明治三十七年七月

心のたどり

尙ほ記す、半夜夢をなさざりし枯坐黙照の折、わが小ひさき魂の、一種不可言の恐怖の急湍に渦まき込まれしと幾そたび。げにその恐怖よ、われをして幾たびか我が生誕の日を誼はしめけむ。さはれ、我れ今、我が生のやゝ光輝ある一峰に立つて、經來たりし心の淵瀬の目くるめく洄波のさまをかへりみするぞ、大神の恩みなる。

聞として群動聲を歛めたる夜半枕上、死よりも黒き恐怖の翼擴げて、冴えに冴えたる我が意識を襲ひ來たるは何物ぞ。見よ、流るゝもの、峙つもの、耀くもの、礙くもの、遂々として行くもの、滲々として湧くもの、すべて兩間に群然たるも

の皆「存在」てふ大事實となつて我が心頭を壓し來たる。理に於いて自ら惑ふところなしと信じたる此の「存在」の事實よ、奇しきかな、今や茫々無涯岸の恐怖となつて我れに迫り來たる。われは唯だく「存在」てふ事實の前に戰ひ慄きぬ。あらゆる「存在」の夢なれかしと念ずる我が果敢なき願ひを嘲りて、見よ、天寂々、地冥々、永遠より永遠を貫く「存在」の大事實は、わが心を千萬仞恐怖の谷に蹴落とす也。「存在」の事實何が故に此くも恐ろしきか、知らず、唯だ知る、其の何故なるかを問ひ辯ふる邊なきほどに限りなくぞ恐ろしき。其は「存在」そのものの養ひはぐむ深奥不可測の恐怖也。曾て一たびは虚無の恐れに襲はれたる我れ、奇しきかな、今は森然たる天地の存在を想うて心ほとく狂はむとす。げに

や一切諸法の存在は、如何なる無宇宙哲學を以てしてか能く之れを空じ得べき。理は能く理上の存在を空じ得べし、獨り情上の權威ある存在を如何にせむや。我れこれを念うて心摧折す。嗚呼諸法の存在は恐ろしき事實也、而してこの大事實の前に戰ひ慄く我れの存在も亦恐ろしき一個の事實ならずや。我れの何ものたるを知らず、唯だ知る、戰ひ慄く者としてこゝに存在するの事實なるを。我が存在の消えて跡なき一夢たれかしと願ふ心を仇にして、見よ、我れてふものの「存在」の事實は、炎の如く、屹として心上に聳ゆるならずや。我が入る息、出づる息のそよとの生命のゆらぎも、今は茫々たる恐れを孕みぬ。此くの如くにして我れ天地の間に在り、此くの如くにして天地無窮の間に在り、而

して兩つながら相對して其の間何の交渉がある。彼れは
時ち流れ、我れは恐れ慄く。彼れ森然として彼處に在り、我
れ耿々として此處に在り。彼れ沈々として眠り、我れ惺々
として覺めたり。彼れ何物ぞ、我れ何物ぞ、唯だ知る、この千
古萬古常闇とまの如く黙々たる天地の間に、我が意識の一點光
のみ熒々として冴えに冴えたる一個の事實を。而してこ
の事實こそは何等深奥なる恐怖を産みいだす無底の淵な
るぞや。

我れは「存在」の恐怖と寂寞とに得堪へずして、我れに似て
我れに優れる者と呼び索め、尋ね出だしてこれに倚らむと
しぬ。されど萬有の何處に我が呼び索むる大能の有情者
はあるか、我れと萬有との間には依然として長江天塹の永

へに隔て流るゝを見るのみ。げにや大觀の哲人は、萬法唯
識の所造と喝破したれど、此の大觀の眞理も、今のわが深奥
なる恐怖と悲哀とに對して何の詮かあるべき、曾て得たり
しわが多少の哲學的超詣の見識、今將た何爲者ぞ。我が靈
覺の自ら開き出だして自ら打ち仰げる此の森然たる萬法
の何處にしも、我が慕ひ求むるものはありや。悲しいかな、
我れ心傷めども自然はわが爲めに胸打たず。此くして我
が渴慕無限の靈魂は山阿水涯を翔り遍うして、復び寂寞と
して疇昔の孤影に還らざる可らざる乎。此くして我れは
水の如き鏡衾の上にわが半夜の瘦影を投げ盡くして、永へ
に

“Little we see in Nature that is ours.”

心のたどり

の詩人歎を累ねざるべからざる乎。

我が友は晒わひぬ、是れ豈眞詩人の聲ならむや、わが眞詩人を見ずや、彼れは能く流るゝ水に生命の文を織り、峙たつ山に慰なぐさ耕かの力を賦す、花は彼れに美しくしき戀を語り、星は彼れに高たかき祕言ひごをさゝやく。露華月光、岳色江聲、何物か詩人温情の一分身たらざる。汝それ詩歌の國、自然の郷に入りて、そこに汝が慕ひ求むるものを得よと。嗚呼友よ、乞ふ復た語ることに勿れ、我れ曾て詩人と共に、詩歌が飾れる「自然」の花野に美しくしき夢を拾ひぬ、さはれ、そは竟に美しくしき夢なりき、「貴きそらごととなりき。覺めての後の峻酷なる事實は、更に一倍の苦痛と反跳し來たりてわが中心を咬みぬ。ゆらゆらと絲遊霞きりむ昨きのの野邊に、けふ霜枯の落莫の思ひ繁く、漚う湫し

と波に漾たぎふ月の埠頭なづに、忽ち見る因果萬壘の黒浪高きを。

嗚呼わが新たに得たる一味の自覺は、竟に我れをして「自然」の郷に、詩歌の國に、美しくしき安住の夢を結ばしめざるを如何にせむ。詩歌の衣を剥ぎ去れる「自然」、畢竟何の剩すとこそぞ。

既に大自然の存在を空くじ去るの力なく、又其の美しくしき詩境の中に我が渴慕の對境を見出づる能はず、我れは依然たる恐怖と寂寞とを抱きつゝ、冷かなる「自然」に眼を閉ぢたり。

我が眼は大自然に閉ぢて内世界に開きぬ、何等廣大なる世界ぞや。觀念の世界也、思想の國也。見よ、こゝにも河嶽流れ峙ち、日星耀あき麗うき、燦乎として更に潤澤あり、光輝あり、

曾て大黙々の「存在」として我れに對峙したりし大自然、こゝにては一切の隔ての籬を撤したり。この國に在るもの、何物か我れと親しきものならざる、何物か我が一分身たらざる。我れはこの國の王者也。我れ一たび笏を把つてさしづ磨けば、空想の翼自由の大野を翔り、理想の車靈光の天を馳す。我れ一嘘すれば、大千幾生滅し、祇劫幾きりびやく翁闢す、この國の住者は、何物か我が隨使の下に奔り且つた偃れざる、彼等は皆わが臣良也。嗚呼我れは是れ觀念國に於ける無冠の帝王ならずや。我れ庶幾こゝろがくは逍遙乎として不朽の樂しみをこゝに享けむかな。自ら惟へらく、優なるかな游なりと。

爾時そのときわれ一個深奥なる聲を聴きぬ。曰はく、爾なんや無冠の帝王の心果たして安きか。爾は自ら僭して觀念國の帝王と

稱すれども、知らずや爾の國には爾の權力の左右する能はざる幾多爾以上の對立者、權威者あるとを。爾聴かずや、義務の觀念の莊嚴無上の聲を、爾一たびこの聲の前に立たば、川邊の葦の如く戦々自ら持する能はざるにあらずや、又見ずや、善惡眞妄、美醜の幾多標準的觀念は、爾に律せられずして却つて爾を律する客觀獨立の權威たるにあらずや。爾は竟に其の笏を捐てて此等權威の前に跪拜せざるべからずと。我れは戰慄せり。我が自ら造りぬと思へる觀念の王國にしも、我が力の撓揉し得ざる獨立不屈の權威あるか。げにや我れ其等觀念の權威を視るに、わが塵の心に染まぬ新鮮の色あり、わが暫聚の姿に似ぬ金剛の力あり。我れより出でて我れをしも支配せむとする彼等不遜の觀念、そも

く何物ぞ、將た何處より來たれる。嗚呼彼等も亦黙々永へに我に對峙する異形の「存在」たる乎。何ぞ其の岌々自ら持して我れと問つるの甚しき。寂寞は我れに還りぬ。あはれ已むなくんば我れは我が如意自在にし得べき忠良なる空想的觀念の臣僕の上にのみ、君乎として曩きの榮華の笏を揮はむ乎。否、我が中心の願ひは復び我が自在にし得べき空想的觀念の奴僕を支配して暫且の安きを貪るにあらずして、我れに似て我が無限の渴愛を瀧ぐべき倚信の對境を得むとなり。而して此くの如きもの我が觀念の世界のいづこにかある。こゝにあるものは消えやすき空想的觀念の奴僕にあらずば、來たつて我れを縛らむとする獨立不屈の客觀的觀念のみ。わが超人的帝王の果敢なき夢

は破れぬ、涕滂沱として流れたり。

我れは心傷みて仆れぬ。爾時、われ優さしき囁きを聞きぬ。曰はく、此くの如くにして恐れ悸き、此くの如くにして心傷つき仆るゝ者、爾一人のみにあらず、智慧の果を喰うて一たび流轉の世界に墮したる者、何人か爾の運命を分かつざる、爾の運命は一切の運命也と。あはれ限りなき優さしき聲にしもあるかな。我が痛恨の腸を剝りし刃は、又我れと同じ生命の一波を汲める諸人の腸をも剝りし刃なるか、あらず、又偉大なる靈魂を永世の星と羅ねたる世々の聖者の腸をも剝りし刃なるか。我れはこの貴き刃の一種甚深の慰藉力を感じぬ。さきに毒洩々を吐きたる刃、今は優さしき同情の手となりて我が痰を褻み、我が苦がき涙に諧奏

の老らべを賦しぬ。嗚呼我が傷痕未だ瘡えず我が涕涙未だ乾かず我が中心の渴慕未だ充たされざれど、一たびこの新自覺の境に達しては、我が願ひはこれ、はかなきすさびごゝろにあらずして、權威ある願ひとなりしにあらずや、我れ一人の私心に倣する要求にあらずして、普遍の生命海を横絶する一道の客觀的要求となりしにあらずや。我れはこの新たなる權威の自覺に立つて我が限りなき悲哀の要求を叫びぬ。

反響は來たりぬ。今ぞ我れ聽く、遠く近く我が靈魂の汀を拍ち來たる永劫の潮の聲を。曰はく、爾恐るゝ勿れ、我れは爾の索むる者ぞ、爾の要めは我が要めなり、爾の歎きは我が歎きなり、爾の愛は我が愛を分けたる一波の愛ぞ、我れは

是れ爾と共に爾が腕を挽くものぞ、我れ爾にあり、爾我れにあり、我れは爾の爾、心の心ぞと。夢に非ず、幻に非ず、魘たり眇たる中に、物あり來たつて我が靈魂の礎を震撼し、我が底ひ知られぬ感情を、潮の如く涌きに涌かしめ、泉の如く溢れに溢れしめぬ。我れは奇蹟の奇蹟を見、人格の人格を仰ぎぬ。我れは大光の裳裾に觸れ、其の氣息を聽きぬ。我れは我が一切の窮愁顛倒、悲痛煩悶を通じて會て不斷に我が裏に働ける大恩寵の自覺に心躍りて、覺えず其の大悲の御手に打ちすがりぬ。法涙淋漓として兩頬を下だりぬ。

噫、我が觀たる所未だ洞然たらず、終に來むこの日を想うて我が心躍る、さはれ此の薄明なる人生の行旅に於いて、一步を大明に轉じたる我が觸發の喜びは、何を以てか之れに

譬へじ。ねがふはこの喜びの、我が無窮向上の光輝ある一
道標たれかし。ねがふはこの喜びの短かるべき我が殘生
の一日くを結ぶ聖なる縁したれかし。

我れ再び大自然に眼を開きぬ、而して路の邊の石にも熱
き涙に餘るこゝろを見たり。我れ再び觀念の世界に入り
ぬ。而して其處に親しき一味同光の法悦を得たり。

（明治三十七年七月）

宗教上の光耀

（神秘的實驗の一面）

宗教上の頓悟もしくは光耀もしくは遍照（イルミネー
ションといひ、エルロイヒツングといふもの）の意識は、各様の
宗派、各様の個人的特質に従つて、其の内容必ずしも一なら
じ。基督教の神人合一、佛教の見性開悟、回々教の光耀、新ブ
ラトロン派の恍惚等の間に存する較著なる差異は言ふま
でもなく、更に尊者テレサヤ、イグナチウスや、十字架のデ
ンヤ、法然や、白隠や、ベームヤ、エックハルトや、彼等が經驗せ
りし宗教上の光耀といふもの、亦復た一々其の意識の内容

に尠なからざる差別を藏すべし。予は今こゝに此等さまざまなる宗教的光耀の事實を彙集歸納して、其の通相を抽釋解説せんとするにあらず、こゝには唯だ主として予輩の經驗に親しきふしある或特殊なる宗教的光耀の内容を展開する所あらんとするなり。期する所は宗教上の事實を提示するにありて、論議研究にあらず。

宗教上の光耀も、しは遍照が、心靈上、一種の開眼の消息なるは言ふまでもあらず。そは「我の高擧也、靈の眼の打開けたる也、新事相、新風光の啓示也。」而してこの光耀の境は時として幾んど全く感情的に現はれ來たることあり。そは一種の感情をもて充ち満たされたる状態なり、朧ろげなる薄明のこゝろ捉らへがたきが中に、強く、深く、澄徹したる平

靜なる喜び、意識の全面に漲りて、而かもその喜び、塵の世の思ひに染まず、衷より竊かに溢れて心の隈を潤ほし治らす。げにこの喜び、掬ばば消ぬべき淡き姿して、而かも夢にあらず、幻しにあらず、世の常のうつろひやすき喜びにもあらずして、たへにあやしき幽玄一味の喜びにもあるかな。この刹那、我の意識はあれど、いと微かなる受動の酔ひ心地にして、一向に至高者に打ちまかせたる歸依の思ひ、優々として永年の楽しみに通ふ。この刹那常在の鍵は既に吾が手にある心地して底ひ知られぬ寂寞の影、亦來たつてこの幽微なる喜びを培ふ。(この境、到底言葉にうつし盡くされず。)

更に知識上の光耀あり、感情上の光耀を前驅とし、若しく

は之れに先ち、若しくは之れと獨立に現じ來たる。何をか知識上の光耀とはいふ。

自營欲を中心とする一切の想念、心像、感情の流れ皆打絶えて、而かも意識分外に惺々、靜かなる知見の鏡こゝに開けて、庭上の松、窓下の竹、飛ぶ鳥の影、浮ぶ雲の姿、一切のもの皆來たつて其の如々の象を宿すに任せたり。この境復た情波、識浪に漂ふ平生の我なるものを見るべからず。「物々皆遊び、物々皆觀る」。我れ庭上の松か、庭上の松我れか。「汝是れ渠ならず、渠正さしく是れ汝」。是れを無我と謂はむか、意識鏡裏の松は、花は、是れ正さしく我れにはあらじか。この刹那に於ける意識鏡裏の松、花乃至一切の物、如何なればかくも曾て經たるとしもなき明瞭親切のこゝろ、饒かなるぞ

や。我、我を無限に超越して、而かも我、我と最も親しく一原に逢ふ。“Great enough to be God; interior enough to be me.”この一種崇高なる矛盾總合の意識境、これ我が始めて天地萬有の眞實相に還りて神游自得せるのこゝろにあらざる乎、始めて本地の風光に面相接して見性三昧せるのこゝろにあらざる乎。如何にか見性三昧せる。

是の意識境(其の間殆んど一刹那なることあり)に於いては、物々皆觀念として流る。平生尋常の意識境に於いては、硬き嶮しき物質の障壁、到る處に撞きて、差別の装ひ、いかめしう、ひしくと我れを取りかこめる觀をなす。對峙あり、軋轢あり、罣礙あり、不可透あり。物質的原子と原子と相尅相殺して、彼此人我の迷執、永へに絶ゆるとあらず。忽然と

して光耀の意識に躋れば、因果萬重の世界脚下に碎けて、唯だ見る、我れと山と水と雲と天と地と、一切物、一切處、すべて明瑩一氣、流るゝが如き觀念の世界として、充ち廣がれるを、こゝに一の窒礙なく、障壁なく、難入難透の響きなし。一即一切、一切即一、げに銀碗の雪一つの色に親しめどもなほ其の界を分かち、月下の驚自他の彩を分かつてどもなほ同じ光に通へり。無邊の法界、唯だ聞く、大いなる一生命の無窮に脈打ち流るゝ聲を。誰れか能く永劫を横絶するこの大いなる生命の流れを限り、絶ち、別かつとを得ん。こゝには萬有はその差別の薄衣、吾等が常に實有の相として執するなるを脱ぎすて、法身一如の透明なる姿として現前す。宗教的光耀の一特相は、萬有を透明と觀ずるとにあらざや。

吾人はまた光耀の意識に於いて天地の戯曲的意識に相參ずるとあり。吾が心の萬有と一體に展び榮ゆゝこゝろぞやがてそれなる。この意識、是れ一切を我が大いなる觀念の懷ろに攝めて、煦め育つるこゝろにあらじか、これを所謂天地的意識なる、神心なる。我れ神心に入れる乎、神心我れに入れる乎。是の刹那、我れは萬有を一體として靜觀すると同時に、萬有自爾の内在の理想に分け入りて、その一々の發展の心を樂しみ、その一々の化育に、心のまらべを合せんとす。あはれ、我儕果敢なき一塵の身を以てして、この宏大なる天地の經綸に與ることを得る、何等の解脱ぞ、何等の光耀ぞ。それ天地萬有は神の無限大の戯曲的創造なり。人誰れか其の深奥なる結構、隱微なる脚色を窺ふとを得ん